故にオレはバケモノ

霊解

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
故にオレはバケモノ

【Ｎコード】
Ｎ０７２３Ｍ

【作者名】
霊解

【あらすじ】
ある研究所で生まれた実験体、その力を使い研究所から逃げ出した彼は世界で何を起こすのか。
文才０以下の作者が書いています。過度な期待はしないでください。

プロローグ（前書き）

『読者への警告』

この作品は作者の個人的な見解、偏見が盛り込まれて作られております。お気に召さない片は戻ることをお勧めします。

プロローグ

もしも、あのとき
手を伸ばさなかったら
僕は、俺は、後悔せずに済んだだろうか。
今という瞬間を
憎しみや怒りで
埋め尽くされずに済んだだろうか。
あの時の選択は間違いだったのだろうか。

「できた！できた。遂に完成だぁ！」
薄暗い研究所の一室で数人の科学者たちの声が聞こえる。
・・ドクン

科学者の前には一つのポッドがある。
中にはちょうど2～3歳になるかならないかの子供がいる。
完成体だ。
喜びに酔いしれている。
「へぇ、これが成功作なんだ。」
―???side―
もうすこしだ。
もうすこしでこの苦痛に満ちた日々からにげられる。
逃げなければ俺たちに自由はない。
後すこしであの子の調整が終わる。
そこが唯一のチャンスだ。
「できた！できた。遂に完成だぁ！」
終わったらしい。やっとだ、やっと終わる。
ドアを開け研究室の中に入る。
あいつらはポッドに釘付けだ。

「へぇ、これが成功作なんだ。」

そういうと全員こちらを向き目を見開く、

「！なぜだ、なぜ貴様がいる。貴様はあの時廃棄したはずだ、ＮＯ－６６６」

「へぇ？ちゃんと区別がつくんだ。そういうことは覚えておく必要がないとか思ってそうだけどね、あんたらみたいな人種は」

しかし、本当によくわかったもんだよ。実験体はみんな同じ顔しているのに。

「そんなことどうでもいい。早く答えろ！！」

「はぁ、あんたらさ、認めたくないけど俺も一応あんたらが創った存在だってこと忘れているでしょ。あんたらの常識で測るのが間違っていると思うけど。なにせあんたらが創っているのはバケモノだからなぁ。あんな方法では終わらんよ。」

「！ック。能力を上げたことがあだになるとは。まぁいい、せっかく帰ってきたんだ。お前も調節して成功作にしてやろう。貴様みたいな失敗作がしてもらえるんだ、ありがたく思え。」

「あんたらさぁ馬鹿？この状況でよくそんなこと言えるね。いま俺があんたらの命握ってんの気づいている？」

「！？貴様創造主にはむかう気か？」

「残念ながらあんたが創ったバケモノはそんなもの気にしないのさ」

そんなこと言いながら一瞬で奴らに近づき殴る。

奴らがくれた常識外れの腕力で奴らがはじけ飛ぶ。残るのは上半身を失った下半身のみ。

最後の一人までこれで殺す。殴る。

残ったのは俺とあの人だけ。

「やはり最後に残ったのはあんただったか、光さん。」

「そうね、こうなると思っていたもの。逃げたいけど、あたしはココで終わる。だけどね、最後にあなたと、成功作を超えた失敗作と話してみたかったの。」

「話か。あんたは奴らと少し違ってたしな。奴らは気づかなかったみたいだけどね。」

「そうね、彼らは最後まで自分が正義だと信じてたみたいね。だけど私らの行っていることはただの悪。それ以下にはなってもそれ以上にはならない。私はそれをわかっていた。わかっていたどわたしは、あの時からずっと狂っていた。あの子を甦らせると決めた日からずっと。死んだ自分の夫のクローンすら利用して。でもやっと終わった。私のやったことは最悪、他人には害しか残さない。きっと私を怨む人はたくさんいる。それを背負う覚悟もある。でもね、あの子は現実から目をそむけた私に振り回されただけ、だからあの子

だけは許してあげて。」

「もとより殺す気はない。しかし衝撃の事実発覚だな。俺のオリジナルがあんたの夫だなんて。あんたも物好きだな、こんな変な能力を持った奴と結婚するなんて。ふつう気味悪がって近づかないものじゃねーのか。」

あれ？ってことこの人おれのおばさん？

「あなた私を普通だと思っていたの」

「そうだな、あんたはどう間違っても普通じゃない。」

「そうね。でもこれで心残りはないわ、あの子《恭治》のこと頼めるかしら？」

「１４にして子持ちのパパってか、でも一応血つながっているんだよな。まぁ、向こうで会うときにはひねくれている息子だな。」

「ふふ、楽しみにしているわ」

光さんは銃を取り出して銃口をこめかみに当てて

「向こうで待っているわ」

躊躇なく引き金を引いた。

少しの間目をつむり、手を合わせる。

立ち上がり、ポッドの方向に向かう。

「お前も俺も変な生まれ方しちまったな。」

近くの操作機器で培養液を抜き恭治を拾い上げる。

まったくグースカ寝て居やがって。

近くにある白衣で包む。

それから、中央管理室に向かう。とにかく情報が必要だ。

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・

・・・・・

・・・・

・・・
・・
・

やっと情報が集まった。

とにかく膨大だったし、途中で恭治の奴がおきやがって泣きわめくし、奴にあげる飯探しに行かなきゃならなかったし、でとにかく時間食ったな。

結構役に立つ情報があったからよかった。俺の情報もまともなのは渡っていない。

どうやらこの研究所は、時空なんとか管理局とかいう、イタイやつらの集まりの組織に属してたらしい。

一応、俺の標的になるな。

それよりこの後どうするかだな。

ここにずっといるわけないだろうしな。

今は眠っているが恭治のこともある。

とりあえずどこかに逃げるのが妥当だな。

そう思いながら立ち上がると、いきなり爆発音がして、数人の足音

が聞こえる。

「なんだぁ？管理時空うんたら局が動くにしても早すぎるだろう」

あっという間奴らがこの部屋に入ってくる。俺を見つけるなり杖みたいなのを構える。

「貴様、ここで何をしている。失敗作」

「ずいぶんな態度だな。さっき寝たばっかなんだから、もう少し静かにしろよな。」

「質問に答えろ！」

「まったく。面倒事はご免だ。大体貴様に何の権限があるんだ。ま、あったとして黙秘権と拒否権はあるんだろう？」

「だまれ、貴様はただ質問に答えていればいいんだ。答えろ、その子はなんだ」

「俺の息子だっつーの」

「真面目に答えろ。その子は、この研究所にいた子供だな。」

「！貴様何でそれを知っている」

「我々の任務はＰＲＯＪＥＣＴ　Ｓの成功作の回収だ。」

・・・・おかしい、情報が漏れるにしても早すぎる。・・いや、局は最初から成功したらここを切るつもりだったのか。

これはやばいな。多分外にもこいつらみたいなのが待っているだろう。仕方ない。

「だったら、俺から奪ってみるんだな。親子の絆をなめるなよ。」

「ふんっ、魔法も使えない失敗作がほざくな」

恭治を抱えている今の状態では俺が動くわけにはいかない。

だったら、あれしかない。

「絶影」

部屋の機器を分解しながら作り上げる。

「消えろ、毒虫がっ」

絶影に先行させ俺が後に続く。

次々と細切れにされる局員ども。

途中で逃げ始める奴らも出始める。

ココからあれを実行させるやつが出るはずだ。

それを理解する。

・・・いた、転移しようとしている。

自分の中のスイッチを入れ、その魔法を理解する。

よし、できた。絶影もやつらをケチらしているから、うかつに近寄れない。

突然後ろから衝撃が来る。砲撃を受けたようだ。しかも、殺傷設定。油断していたな。

転移して逃げたものだと思っていたが、違ったか。

早いとこ逃げなきゃな。

自分の中で魔法陣を練り上げる。行先はランダム、どうなるかね。

「転移」

―???ｓｉｄｅ　ＥＮＤ―

「提督、目標が成功体とともにげられました。」

「っち、まぁいい。アルカアンシェル準備」

「アルカンシェル準備、準備完了。」

「アルカンシェル発射」

こうして一つの研究所が世界から消えた。

プロローグ（後書き）

どうも、零解です。
「故にオレはバケモノ」はじまりました。
主人公の名前はまだ出てないです。決めてないからですね。次までは出そうと思ってます。
能力はおいおい説明しますが
一応出てきたものだけ
「絶影」
スクライドに出てきた劉　鳳のアルター。自律稼働型。
基本拘束具で力を押さえている。２本の鞭で戦う。
ヒロインは一応すずかにしようと思ってます。
フェイトもいいんだけどな。
なのははなしですね。
ハーレムはやらないつもりです。ところでハーレムって何人以上のこと指すんでしょうか？
基本アンチもののつもりで書こうと思っているんですが
どうも感情の表現が難しいですね。
まぁこんな作品ですが読んでいただければ幸いです。
感想、誤字の指摘、評価などお待ちしております

第1話　はじまる俺たち（前書き）

今回も独自の設定を盛り込んでます。

第1話　はじまる俺たち

―？？？ｓｉｄｅ―

転移先は空だった。

助かった。正直大気圏外までいったらつかる気がしない。

恭治はいまだに眠っている。すごいなコイツ。

さっきから背中が痛い。直撃だったから、背中がえぐれてるはずだ。

超速再生が発動しないということはあの攻撃に肉体活性を封じる何かがあったのかもしれない。

血が足らんくなってきたのか目がかすむ

このままでは落ちてつぶれたトマトみたいになってしまう。

最後の力を振り絞る。

「獣化」

背中から三枚の翼が飛び出て体中が羽毛に包まれる。

意識が途切れ欠けているなか、どうにか翼と腕で恭治を包み衝撃を吸収できるようにする。

広い場所を見つけどうにかその方向に軌道を変えてから俺は意識を

手放した。

―???side　END―

この日に海鳴市では落ちてくる隕石を目撃したという人が少数だがいた。

―side　Suzuka―

お姉ちゃんが結婚してドイツに渡ってから早数年。

ノエルもお姉ちゃんについて行った。

すっかりファリンとの生活に慣れた。

ただ、やはり少しさみしい。

そんな事を思いながら朝食を食べて部屋に戻った時

突然庭から何かが落ちてきたような音が聞こえた。

ファリンとともに外に出ると黒い物体が庭にクレーターを作りその中心にいる。

とにかく近づいてみなきゃ

「すずかちゃん危険ですぅ～」

ファリンがそんなこと言っていた気がするが、無視して走り出す。
クレーター近づくと同時にいきなり黒い物体が変化し始める。
羽根みたいなのと体中を覆っていた羽毛が消えて残っていたのは、
おんなじ年くらいの男の子と赤ん坊だった。
「？どういうこと」
何もわからなかったが、何かが変わることはわかった。
―ｓｉｄｅ　Ｓｕｚｕｋａ　ＥＮＤ―

―？？？ｓｉｄｅ―
「・・・・知らない天井だ」
しかし、どうしたもんだか。
起きたら知らない場所ってどうよ？
まぁ、命あるだけいいな。
とりあえず起き上がる。どっかの部屋みたいだな、かなり高級な。
そんなこと確認していると恭治がいないことに気付いた。

っち、どういうことだ。そう思いながら
ドアに近づこうとすると
ドアが開いて紫色の髪をした女が入ってきた。
へぇ、なにか混じってんな。
「あら、もう目を覚ましたんですか？」
「ああ、どうやらあんたが助けてくれたみたいだな。んで、悪いんだか赤ん坊いなかったか？」
「えぇ、一緒に寝てたんですけどいきなり、泣き出して、おなかがすいていたみたいなので下でご飯を上げてます。」
「そうか、悪いな」
「・・・あの、どうしてうちの庭に落ちてきたのですか？」
「そうか、あそこは、あんたの家の庭だったか。悪いな、穴できたんじゃねーか？」
「ええ、それはいいんですが、どうして落ちてきたんですか。」
「・・・・・・・・・悪いが話したくない。とてもあんたが理解できるとは思えないしな。」
「・・そうですか、でしたら無理に聞きません。そうだ、自己紹介してなかった。わたし、月村すずか、あなたは？」

「名前か、そんなものないな。あるとしたら番号だけだ。」

「・・・え、どうい「そうだな、適当に呼べばいいさ」」

「あんたには世話になったみたいだし、何か返せればいいんだが。あいにくこちらは一文無しなんでね。まぁ近いうちに絶対返すは。」

そう言いながら立ち上がり、玄関まで行こうとしようとすると

「あの、帰るとこはあるの？」

「・・いや、ないな。この世界は初めてだ。でもまぁ、何とかする。」

「うちでよけれな、ココにいてもいいですよ」

なんだよ、そんなさみしそうな眼しやがって。

「はぁ？いや、それあんたじゃなくて親が決めることなんじゃないの？よくわからんけど」

「うちには親がいないので」

「そうか悪いな。」

「いえ、もう慣れました」

考えなかったわけではない。

ふつう俺が起きたこと知ったら、真っ先に親に知らせるだろう。
しかし、どうする。たぶんまだ追手もいるだろうしな。
ここに住み着くのは危険なんだが。恭治だけ預けるってわけにはいかないしなぁ。
あいつはまだ何が起こるか分かってないからな。
だが今のおれの状態で金を稼ぐにしても少し無理がある。
「わかった。少なくとも一人で生活できるまで、世話になる。」
「そうですか、わかりました。部屋とか手配しときます」
「あぁ、頼む」
しかし最近の中学生は、たいへんなんだな。
まぁ、いいや。恭治迎えに行こ。
確か下にいるとかいってたな。

「ほら、マックス、ごはんでしゅよぉ〜」
「ぶ〜ぅ」
なんだこれ。マックスってなんだよ。

「おい、あんた。こいつにはマックスじゃなくて恭治という親に貰った立派な名前がある。」

「へっ？ほぇ、あ、起きたんですかぁ。へぇ～お前マックスじゃなくて恭治なの。言ってくれなきゃわからないよ～」

どうやら天然らしい。まぁ、いい。

「今日から世話になることになった。よろしく頼む。」

「ほぇ？そうなんですか～。よろしくおねがいしますぅ～」

「あぁ」

恭治は目の前の飯と悪戦苦闘している。どうやらピーマンが嫌いらしい。

「よぉ、恭治。元気してたか？」

「ぱ～ぱ？」

「だから、違うって。まぁいいけど、ちゃんと飯食えよ。おれらは常人よりエネルギー消費が激しいんだから。」

「ぶ～ぅ」

そんなこといいながら、しぶしぶと食べ始める。

なんだかんだ言っても腹はすくのだろう。

これからの生活どうしよう、主に飯代。

まぁ何とかなるでしょ。その前に名前考えなきゃな。

そんなこと思いながら近くのソファに座って眠り始めた。

第1話　はじまる俺たち（後書き）

ファリンは一応人間ってことにしておきます。
ｓｔｓの手なんで多分恭也と忍結婚してると思うし。
ノエルは忍専属ですから当然ついていく。

いまだに主人公の名前が出てこない。

どうしよう。

やっぱり文才がないのを痛感します。
まずボキャブラリが少ない。

感想その他お待ちしてます。

第2話　はぁ、だめでした（前書き）

おもったんです。もう好きにやろうと

矛盾？
知りません

文法？
知りません

設定？
結構適当

こんな感じで行きます。すみません

第2話　はぁ、だめでした

この家に住むようになって一ヶ月たった。

正直、この世界の言葉はすでにインストール済みだったから苦労しなかった。

あ、ちなみに名前は決まった。

光さんの夫の名前が研究所から持ってきてたデータの中にあったんで、それを基に考えた。

んで今のおれは柊創路（ひいらぎそうじ）って名乗ることにした。

当然恭治も柊恭治で登録しておいた、俺の甥って形で。

だってそうだろ、俺のオリジナルが恭治の父親で、俺は見方によってはオリジナルと双子みたいな関係なんだ、つまり俺が叔父になるってことだ。さすがに父親ってのは・・・・・ねぇ？

あ、データなんだが調べたら結構いろいろわかった。あの研究所は本当に末端だったから、あの中央管理室にあった情報はそんなに質のいい情報じゃなかったんだが、光さんのパソコンに残ってた情報はマジ助かった。まぁわかったことは、管理うんたら局？は結構黒いことやってるってことと、一枚岩じゃないってことなんだよな。俺らに害がなかったらどうでもいいんだけど、害あるからね、あいつら。研究所も消しちゃっただろうしね。実際俺は違法実験をそんなに否定してない。あれがなかったらおれも恭治は生まれなかった

ろうし、恭治に至ってはあの実験の最終目的だ。実験を否定するのは今の恭治を否定することになる。オレはそんなことしたくないしな。まぁ実験体の廃棄とかをやめてくれればいいけど。

その恭治なんだが、こっちは厄介だ。

あいつは一応最終調整が終わってたから生命維持には問題がないんだが、肉体があり得ないことになってる。

身体能力を見てみれば俺の数倍をいく。今の恭治でだ。

いまはまだ特に支障が出てないが近いうち必ず出てくる。

んで恭治は最近ファァリンとすずかと仲良くなった。特にファリンと。

そりゃあもう、あれ？おれ必要ないんじゃね、とまで思うくらい。

ただやはり俺とのつながりもあるみたいで見つけるたびにパパとか呼びやがる。こまったもんだ。

さて、んでいま最大の問題なんだが…………………

「なぁ、悪いとは思っているがこっちにも事情があるんだ。わかってくれよ」

この目の前でむくれているおじょうさんだ

「こんな言い方したかねえけど俺らはもともと俺らが一人で生活ができるまでってことでココで生活してたんじゃねーか。」

「そうだけど、せっかく仲良くなったのに。ここの生活に不満でもあるの？だったら直すからさ。ね」

「そういう問題じゃねーンだ。俺らがここにいるといずれかはあんたらに迷惑がかかる。高確率でだ。」

「だから、その理由を教えてって言ってるの。話してくれないとなにもわからないよ。」

さっきからこんな感じだ。

別に俺らのことを言って拒絶するのが怖いわけじゃない。はっきり言ってどうでもいい。ただ情報を漏らすのはなるべく避けたい。

仕方ない。あんまり言いたくないんだけどな。

「あのさ、あんたらもおれらに隠していることあるよね。それと同じで俺らも隠さなきゃならないの。」

「！！」

すずかの目が見開く。

「知っていたの？」

「あんなにあからさまに隠されたらな、大体何か分かっているがな」

「そう。だったら、なおさらココから出すわけにはいかないね。」

「おいおい、俺が考えていることが間違ってるかもしれないだろ」

まさか自分の首を絞めることになるとは。

「ううん、創路君はかしこいから分かってると思うもの、それになるべく不安の種は消しときたいし」

「はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・仕方ない。おれもなるべく情報を漏らしたくないんだがな。ココから離すことは他言無用で頼む」

「うん、わかった」

「かんたんにしか言わないぞ。俺らは研究所から逃げてきたんだ。俺は実験体、失敗作、恭治は成功作。というか恭治しか成功作になれなかったんだけどな。まぁんなことはいい、おれは、廃棄されてそのまま死ぬはずだった。まぁ死んでもよかったんだがな。ある研究員の気まぐれで助かった。んですぐに逃げてもよかったんだが、そのまま逃げるのはしゃくだったんで成功作を盗んで逃げてやったんだ。そしたらその研究所の上の組織が俺らを追っかけてきたってわけだ。それで俺はこの世界に逃げた。まぁ、そんなところだ。」

すずかは目を見開いている。

「・・・・・・・・このせかい？」

「あぁこの世界は管理外世界だったな、そうだな、世界は多数あってその一つから俺は逃げてきたってとこだ。」

「それは一応知ってるんだ。友達が時空管理局ってところで働いていることから。」

「！なんだとっ」

あまりの情報に立ち上がる。考えていなかった。ココは管理局とは無縁だと思った。

「っどうしたの？」

「その友人には俺らのことを伝えたのか？」

「え？」

「どうなんだ」

「ううん。最近向こうで働きずめらしくてあってないんだ」

「そうか」

一応安心していいな。だがどうする？すずかがそいつと友達っていうならあいつとも友達だろう。余り状況は良くないな。情報を広げないように交友関係はいたのに管理局とつながってるやつとしか交流がないとは皮肉だな。

「それならなおさら・・・・・・・・いや、そうだな。すずかの言うとおりしばらくはここに住もう。ただし条件付きだ。もちろんち

ゃんと金は払う。」

「え、条件？お金はいいよ」

「一応そこらへんはきちんとしておく。条件は簡単だ。その管理局で働いている友達に俺らのことを言わないことだ。」

「えっ？でも、その事情なら離したらいいんじゃないの？」

「まぁ、ふつうはな。俺らとしては管理局は害にしかならない。」

「どういうこと？」

ちょっと怒ってるな。まぁ一応友達がはたらいてるんだもんな。

「俺らを追っているのが管理局ってだけだ」

「そんな、でもなのはちゃんたちに言えば何とかしてくれるかもしれないよ」

おいおい”たち”って、ひとりじゃないのかよ。

「そうだな、そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でもな一個人で組織は変わらないぞ。それに無用に情報を広げるのは得策じゃない。俺はやつらからしてみれば今すぐ消したい汚点なんだよ。」

「・・・・でも「これ以上の論議は無駄だ。それに実際に追われているのは俺と恭治だ。あんたじゃない。」」

言外におまえは関係ないという。

「おれは抑止力だ、すずかが情報を漏らさないように。その代わりおれはすずかの秘密を漏らさない。どうだ。一応平等だろう？」

「そうだけど・・・・うん、わかった。」

あきらめたのか、今は分が悪いと踏んだのか、まぁどっちにしろこの議論は終わったわけだ。

さて、あいつも口止めしなきゃな。

はぁ、なんてこったい。

・・・・・実は仕事に困ってた俺はこの家で苦悩してた時にすずかの友人、燃える女、アリサ・バーニングに仕事を回してもらっていたのだ。

はぁあいつの説得はめんどいぞぉ

－side　すずか－

創路君は部屋を出てった。

多分アリサちゃんの所に行くんだと思う。

ぶつぶつと”あいつの説得はたいへんだぁ”とかいってたから。

アリサちゃんは創路くんの作業スピードの速さを気にいっててどんどん仕事を回しているらしい。

おかげで楽できるってこの間言ってた。

少し重労働かなと思う。

だけどどうにか、創路くんをひきとめられた。

私のわがままなんだけど。

だけどおどろいたな、私の秘密がばれちゃってたなんて。

拒絶されるかと思ったらどうでもいいみたい。

お義兄さんとは違った受け止め方だとおもう。

一応お姉ちゃんに報告したほうがいいんだろうけどな、どうしよう？

あとはなのはちゃんたちの働いている場所に追われてるって言ってた。

そういうことならなのはちゃんに言わないほうがいいんだけど、

どうしてもなのはちゃんなら解決してくれると思っちゃう。

まぁ贅沢言っちゃだめだろうね。

現状維持で十分だろうね。

「まま～」

恭治くんがこちらに走ってきた。

最近恭治くんは私をままと呼ぶようになった。

ファリンが拗ねてた、”私のほうがずっと一緒にいたのに”って。

そのあとお姉ちゃんって呼ばれて喜んでたけど。

だけどどうして年下の私がママなんだろう？

聞いたら泣いちゃったからそれ以降聞いてないんだ。

「どうしたの？」

「ごはん～。ごはん～」

もう１２時だ。結構はなしてたみたい。

しかし、恭治くんはよく食べる。創路君も

あの二人が来てから食費が跳ね上がった。桁が２つぐらい増えた。

全然苦にならないけどいいんだけどね。

それに今の生活はすごく気に入っているんだ。一人で食べるご飯とは比べ物にならないほど楽しい。

多分今私は幸せなんだと思う。

第2話　はぁ、だめでした（後書き）

なんだこのヘタな文は、こんなもの世に出すんじゃない。

すみません。本当に

才能ほしい。作家のすごさが分かる今日この頃であります。ほんとすごいと思う。表現が俺はもうひどいからね。

えっとアンケートです。皆さん協力お願いします。

この後の主人公たちの行動です。

1、管理局に入って中から改革、まさにＣＧのスザク

2、スカさんと一緒に管理局つぶそう。ルルーシュの声はいいよね。

3、それ以外。

どれかでお願いします。感想らんに記入してください。

ちなみに

1だった場合、主人公は陸のほうに進む予定です。主に最高評議会とレジアスを説得して改革。理由ーこっちはなかなか見ないから。

2だった場合、主人公がどうにかスカさんに接触。スカさんはいい人です。でもぉどうなるかぁ未定☆

3については具体的にどんな感じがいいのか教えてくださると幸い

です。

感想・誤字脱字の指摘、評価お待ちしております。

主人公設定（前書き）

これ書かないと
話が想像できないんじゃないかと

ちなみにまだアンケート募集してます。

主人公設定

主人公

氏名：柊創路（ひいらぎそうじ）

性別：男

誕生日：９月９日　１４歳

身長：１７１ｃｍ

体重：６８Ｋｇ

外見：黒髪、黒目（目は死んでいるとよく評される）

性格：一言でいえばめんどくさがり。他人と自分の間に線引きしていて、基本他人は信じないし興味ない。今のところ自分以外で気にしているのは恭治のみ。他は赤の他人。

自分を人間として認識しておらず、どちらかというとバケモノとして認識している。また必要なら殺しも躊躇しない。人間が決して弱いとは考えておらず、強いものが強く、弱いものが弱いと考えている。

能力：

－超速再生：常備展開型能力。周囲の魔力を取りこみそれをエネルギーとして変換し体の活性化を行い負傷した部分を修復する。そのため老い先短くなることはない。ただし体が活性化できないと発動しない。

－精神感応性物質変換能力（アルター）：自分の意志により周辺の生物以外のあらゆる物質を原子レベルで分解し、各々の特殊能力形態に再構成することができる特殊能力。－ｗｉｋｉｐｅｄｉａより

使えるのは、シェルブリット、絶影、そしてラディカル・グッドス

ピード。自身の魔力を分解して再構成することも可。

『スクライド』より

ー直視の魔眼：「モノの死」を視覚情報として捉えることのできる眼。「生命活動の終了」ではなく、あらゆる意味や存在そのものが発生した瞬間に定められている概念である“いつか来る終わり”。所持者の脳と眼球でワンセットであり、見ることができる「死」は所持者の認識に左右される。対象物の中の限定的な部分に関する線や点だけを突くことも可能で、体内の毒物や病んだ内蔵などを限定して殺せば他は傷つけずに排除できるため治療としての応用が可能。

ーwikipediaより

創路は度重なる臨死体験の果てほぼすべてのものの“死”を理解できる。ただし常に発動しているわけではない。

『月姫』より

ー獣化：獣に変化する能力。獣化するとヤタガラスになることができる。またより戦闘に適した獣人化も可能である。性能は純粋な体術で一個部隊を圧倒できるほど。この形態では背中から第三の腕がありそれを使用し戦闘する。また空も飛べ、必要に応じて羽根を展開できる。創路は変化するとどちらにしろ服が破れるので嫌っている。

（実を言うと落下後変化を解いたため、創路は裸。それをすずかが赤面しながら家に連れ帰ったという裏設定がある。）

ー高速演算可能な脳&分割思考：名前のとおりである。これにより常人より理解が早い。また分割思考はマルチタスクと同じものであるがこちらは純粋な脳力であり、魔法に依存しない。

一食する（イーター）左腕：左腕が展開し大きな口になる（ｂｒｅａｃｈの黒崎いちごのホロウ化が進んだ時に出てきたやつと一緒）。食べた対象物を身体に適した状態で取り込む。例えば、リンカーコア、血液や血肉。またレアスキルも取り込むことは可能だが、だいぶ劣化してしまう。のちに自分で鍛えることも可能。超速再生が使えないときに等に使用する。

戦い方：一対一の際は剣術のみ。使うのは刃が二つある刀『双爪』（形状はＦＦＶＩＩＡＣのカタージュが持っている刀「双刃」）。多数の際は絶影を使うが手加減できなくなると全能力で蹴散らす。

武器：双爪ー刃が二つある刀。この刀は二つの刀（長刀、短刀）からできておりいつでも分離、結合できる。分離する際には持ち手の中心が割れ、下の長刀を上の短刀から引き抜くことにより分離できる。また刃には彼が独自に開発した術式が彫りこまれており、決して欠けることがなくなっている。もう一つ仕掛けがあるがまだ秘密。

出自：ＰＲＯＪＥＣＴ　Ｓの６６６番目の最後の実験体。研究自チームの柊光（ひかり）の死んだ夫である柊想（そう）のクローン体である。柊想は超速再生をレアスキルとして持っていたため研究費用の削減を理由にクローンで実験するようになる（クローン体で数人分の実験が可能と後のデータでわかる）。成功作を超えた失敗作と呼ばれる。Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｓは柊光のもと『デバイスなしでの魔法行使を可能とする人造魔導士の作成』を目標としてきたが柊光の本当の目的は無くなった息子《恭治》の再生。結果として両方の面でＰｒｏｊｒｃｔ　Ｓは成功してる。この面で柊光はプレシア・テスタロッサを超えたといえる。このため柊創路もデバイスなしで魔法を行使できるが、彼には欠陥があり魔法自体は行使できない。実はこれは柊創路がたんに魔法を行使しなかっただけであり実際は行使できる。また彼のアルター能力は柊想から受け継いだものとされ、柊想より数倍の能

力を保有している。他の実験体は使えなかったが彼のみ可能である。実験当初は彼も使えなかったが生体ポッドに数カ月放置した後には使えるようになっていた。長期睡眠中、彼自身は向こう側の世界に見ただけだったのだが、先に廃棄されたほかの実験体が向こう側の世界にアルター体として存在しており、彼らと意識が結合した結果として数倍強力なものを得ることになった。
頭脳面でも、頭脳指数が高く測定不可能と出ている。これは生前科学者だった柊想の脳と、後天的に手を加えたことによるものと考えられる。また理解力、観察力、洞察力の面で優れていて、特に理解力は他を圧倒する。

イメージ：
＞ｉ１０８１８―１１９７＜

「かったり～」
「テメーの終わりまであと連れてってやるよ」
「喰らってやるよ」

氏名：柊恭治（きょうじ）
性別：男
誕生日：３月１５日　３歳
外見：青味がかった黒い髪、そして赤い目
性格：食欲旺盛な３歳児、急速な速度で言葉をしゃべるようになっている。創路とすずかを父と母と呼ぶ。これは創路が柊想のクローン体であったため、彼の記憶にあった、父の顔と一致したためである。またすずかを母親と呼んだのは、彼女が外見上一番父と年が近かったためである。
出自：柊光と柊想の息子。２歳のときに死亡したが、柊光の研究に

より蘇生した。Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｓの成功体として生まれ、身体能力は創路を唖然とさせるほど。また超速再生も一応使えるが、創路のと比べると劣る。頭脳指数は柊光の息子だけあって高い。

イメージ：
＞ｉ８３６４―１１９７＜
・・・・目がでかい

「ごはん」「パパ」「ママ」

主人公設定（後書き）

うわぁなんというチート。
絵が下手なのは許して
後暗いのも

後々修正するつもり。
獣人形態ものせたりするつもりです

一応アンケート再記

この後の主人公たちの行動です。

1、管理局に入って中から改革、まさにＣＧのスザク

2、スカさんと一緒に管理局つぶそう。ルルーシュの声はいいよね。

3、それ以外。

どれかでお願いします。感想らんに記入してください。

ちなみに

1だった場合、主人公は陸のほうに進む予定です。主に最高評議会とレジアスを説得して改革。理由ーこっちはなかなか見ないから。

2だった場合、主人公がどうにかスカさんに接触。スカさんはいい人です。でもぉどうなるかぁ未定☆

３については具体的にどんな感じがいいのか教えてくださると幸いです

第3話　聞いてないぞ（前書き）

つかれた

第3話　聞いてないぞ

はぁ、どうにかアリサを説得したんだ。いやマジで理由話さずにあいつを説得とか自殺行為だね。

具体的には仕事量が増えたんだよね。もう比じゃないって。はぁ、恭治おじさん頑張ってます。

――――――――『故にオレはバケモノ』第三話――――――――

あの自殺じみたアリサの説得から半月がたった。

この間いろいろあった。

まずすずかの誘拐。

電話受け取ったのが俺だったんだ。あれは不幸だった。いや、ほんとに。

電話に出たらいきなり金を用意しろなんて言われてさ。思わず全部食費に消えたって答えてしまった。

そしたら相手がキレちまって、もう殺してやるとかいってよ。ファリンが大騒ぎして警察警察とか言ってたよ。

もうなんであんなに短絡的なんだか。

結局どうにか犯人をなだめ、用意されたかねを俺が指定された場所に持っていくことになった。めんどくさかった。

金を置いたら去れとか言われてたからさっさと帰ったら、またファリンがお嬢様連れて来いってうるさくて、結局また戻って犯人を捕まえることになったんだ。

とりあえず金を置いた場所に戻ったら金まだあったから近づいたら変なおっさんたちが

「それはおれたちのだぁ」

とか言うもんだから、

「うん、じゃすずかかえせ」

って言ったらめっちゃびっくりしてた。

「！お前約束を破ったな。人質がどうなってもいいのか！！」

正直どうでもいいんだけど

「どうでもよくないよ、住むとこがなくなっちゃうじゃんか。さっさとすずか出せよ。どうせその人数で来ているんだ、近くにいるんだろ」

「お前人質の命は我々が握っているんだぞ」

「じゃ、あんたの命を俺が握ってるんだ。さっさと渡せ」

いいかげんイライラしてきた。見せしめにやつらの一人に近づいて殴る

「！ッグェ」

その場にひれ伏す。大丈夫、殺してない。殺してないけど、もう首の下動かないかもね。

「ね、さっさと渡さないとあんたらこうなるよ」

「ひぃぃ」

んなこと言って逃げやがった。大丈夫顔覚えたし。

結局んなことやった後に近く探って、近くの車にいたすずかを連れ帰ったんだ。車の窓壊してたところ人に見られてもんだからいろいろめんどかったけど。

まぁ、警察に勝手に行動するなって言われて一件落着だったんだがな。ちなみに俺が殴り倒した男に関しては、口がきけなかったらしいから適当言っといた。

ファリンはすずかに感謝されまくってた、警察がいいことばっかり言ってたらしい。実際はおれしか行動してない気・・・・・・・・・・・・・

まぁそれが終わった後に恭治の誕生日があった。

当初はすずかの知り合いに作ってもらおうってことになっていたんだが、そいつの娘が管理局で働いているって知った瞬間、アウトだったね。

すずかも悪気はなかったらしく、謝っていたからいいけどね。

仕方なくそこらへんで適当に買おうと思ったんだが、すずかは

「小さいころはちゃんとしたもの食べなきゃ」

とか言いながら断固反対してきたんだよな。なんだよ、ちゃんとしたものって。それなりのものを買うつもりだったんだぞ。栄養面も考慮して。

畜生、お嬢様め。舌が肥えているのだろう。

これは少し悔しかったんで、俺が作ることにした。

それは、言ったら

す「やっぱり、私が代わりの店探すよ。」

ファ「私がやりますよ。」

恭「おなかすいた。」

とか言いやがって。

「ふん、期待せずに待ってろ。その顔が驚愕で染めやろう。」

とか言った俺が始まりだったんだ。

まず図書館に言って、ケーキづくりに関する本を全部読んだ。分割思考全開でだ。

次にそれをもとにケーキを作ってみた。ふつうだった。ただファリンに食べさせたところ、結構うまかったらしく

「何で一回でこんなにうまくつくれるんですかぁ～、ずるいです」

とかいいながら、その才能分けてくださいとか言ってきてうざかったんで鼻で笑ってやった。

そしたら泣き出して逃げてった。すずかに慰めてもらってた。主従関係はどうした、とか聞きそうになったが、友達だ、とか返してきそうなのでやめた。

とりあえずそのあとケーキやを食べ歩いた。

パティシエどもの作り方を盗むために絶影と視神経をつなぎ掌サイズにして送り込んだ。

まぁそのほかいろいろな苦労の末に作ったケーキを誕生日に出した。

サイズは結婚式のサイズ。恭治とオレがいるからな。

結局一時間もしないうちに感触した。

恭治の消費スピードが半端なかった。

みんな「うまい」といったので当初の目標はクリアしたらしい。
なにより、恭治が喜んでいたし。
めんどかったがそれなりに楽しめた。

だがなこれは、いただけん。
今日は仕事もなく、結構前からやり始めている研究を推し進められると喜んでいたのだが。
時計の針が１２時を指したころ、いきなり部屋のドアから特殊装備した男たちが入ってきた。
ちなみに俺の部屋には恭治は寝てない。あいつは最近すずかと一緒がいいらしい。
すこし寂しい気もするがおれも遅くまでやりたいことやってるから好都合だった。
「何様だ、テメーは、一応ここは俺の部屋なんだぞ」
「！？貴様、何者だ！」
ふむ、俺が狙いじゃないと。
「何ものってこの部屋の住人だよ。」

「ふざけるな」

他に答えようがあるのかよ。

「柊創路だ」

「貴様のような人物の報告は入っていなかったぞ、貴様何が目的だ？一族か？」

へぇ、どうやらすずかのお家騒動らしいな。まぁ巻き込まれるのはごめんだね

「はぁ？一族？なにそれ？？だいたいここに住んでいるって言ってるじゃんか」

「仕方ない、貴様には死んでもらおう。」

「は？」

なにそれ。聞いてないし。

結局巻き込まれるのかね？

めんどい

んなこと言ってる間にやつら銃ぶっ放してきやがった。

「げっ！」

急いでソファの裏に隠れる。

今のオレは余り戦闘すべきではない。理由は不明だが再生の速度が遅いのだ。銃弾一発でも十分致命傷だ。

余り使いたくないがな、

部屋のベッドを分解し「絶影」を呼び出す。

「蹴散らせ」

「なんだこれは？自動人形か？」

絶影を相手に突っ込ませ鞭で首から上を落とす。

これで、ひとまず安心と。部屋は生臭くなったけど。

すずかも家のことなんだし対策してるだろうから大丈夫だろ。

そんなことを思いながら研究を再開しようと思ったんだが、

ふと思ったんだ。

あ、

恭治

すずかといっしょじゃん。

あれ？やばくね。

もう気づいた瞬間部屋から出てたね。

絶影に先行させ遮るものすべて切り開いた。

結果赤一色だけど。廊下が。

すずかの部屋に入ったら

一人の男が恭治の首に手をかけながらすずかに何か要求してた。

プチン・・・・

今気づいたんだがオレは結構子煩悩だったらしい。

「テメー人んちの子供に何やってんだぁぁぁぁ」

人外れの脚力で地面をけり一瞬でやつの手から恭治を奪え返す。

俺がいた場所には大きな穴ができていた。さすがに床が持たなかったようだ。

「よかった、創路君」

すずかが座り込む、一応俺の心配もしていたみたいだ。

「なにものですか？」

「ああん？テメーに教える義理あるかボケ」

「誰だか知りませんが、我が一族の問題です、部外者は立ち入らないでほしいですね。」

「テメーらの問題なんか俺はどうだっていいんだよ、おれは」

すずかのピクリと反応する。

「でしたら「だがな、テメーはオレに喧嘩を売った、恭治を巻き込んだ。だから徹底的につぶす。それだけだ」！！！」

「それなら仕方ありません、死んでもらいましょう。」

「めんどいが、決めたんでね。死ね。」

絶影は使わない。こいつはおれが殺す。

「……展開」

左腕が変質を始める。

出てくるのは大きな口。すべてを食らうもの。

「イーター」

「テメーにはとびっきりの絶望をプレゼントだっ！」

左腕を伸ばしやつの足から喰らっていく。

へぇ、やっぱり。

「ぎゃあああああああああああ」

徐々に食べる範囲を広げる。

下半身をすべて食い終わったところでやめる。

「息耐える瞬間までその空白を、絶望で走り抜けな。」

イーターを戻す。

「ひぃぃx、助けてくれ、痛い、、なん、でも、、や、る、た、、、すけて、くれ、、たす、けて、、、、、」

後ろで何か言ってるが気にしない。

「大丈夫か」

少しおびえているな。ま、仕方ないか。

「まぁ、恭治もおまえも無事だったんだ。ひと段落だな。」

一応気遣って部屋を出る。

途中廊下でファリンが目を回していた。真っ赤だもんな廊下。血で。

部屋に戻って気づいたんだが今日どうやって寝よう。

分解しちまったしなベッド。

残念だな。アルターを使って構成するってのもいいんだが面倒だしな、

床で寝るか。研究もこんなに血なまぐさいとできないし。

と思ってたんだが、すずかが入ってきた。恭治を抱いて。

「・・・・・・・・・創路くん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・あの、ね」

「こわいか？」

「！！」

「それが多分一般的な反応だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だけどな、恭治を恐れるなよ。こいつは成功体だがオレとは違う。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「正直な話、見せる気はなかったんだがな。だがさっきおれはお前の一族のことを正しく理解しちまった。これじゃあ契約に反するな。だから、俺らのことを話すよ。」

「！！いいの？」

「おれはそこまですずかのこと信頼してない。最初は利用しようって魂胆だったからな。別に嫌ってはいない。だがな俺には必要なくても恭治には必要だからな。おまえが。だから、お前には信用して

もらう必要があるんだ。」

「創路君には私は必要ない？」

またその目か。よっぽど今の生活が気に入ってるんだな。

「どうだろうな、最近おれも変わり始めているからな。しゃくなことに」

なに胸をなでおろしてんだよ？

「まぁ、んなことはいい。とりあえずおれたちのことだな。そうだな、俺たちは研究所でＰＲＯＪＥＣＴｓっていうプロジェクトのもとに生まれた。文字通りオレは失敗作、恭治は成功作として。このプロジェクトはデバイス、あ～、魔導士専用の武器だな、まぁそれを必要としない魔導士の作成と恭治の再生を目的としてた。実験体は恭治以外全員恭治の父親のクローンなんだ。そいつが特殊能力をいろいろ持っててな、まぁその一つが自己再生みたいなもんがある。それで実験体の作成費用を削減したんだ。

オレは６６６番目の実験体。他の実験体と同じように生まれたはずだったんだがな。何らかの理由で生体ポッドに長期に放置されてたときに、オリジナルのもう一つの特殊能力で他の廃棄された６６５人の実験体のやつらと意識を結合してな。能力もいろいろ強化されてな。そうだな、オレがオレとして生まれたのがこの時かな。まぁ、んでそのあと廃棄されそうになって、気まぐれな研究員に助けられてな。他の研究員を皆殺しにして、恭治の母親に恭治を託され管理局に追われてここに逃げてきたってわけさ。

恭治の説明は少し難しくなるな。あいつは2歳の時に病気で死ぬ直

前までいってな、母親がこのままでは死ぬと思って夫の能力を使って、恭治を分子レベルまで分解したんだ。狂気だな。このプロジェクトより前に似たようなプロジェクトFっていうのがあってな、簡単に言うと使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生ってやつなんだけど。それの中にクローニングした素体に記憶を定着させる事により、従来の技術では考えられない程の知識や行動力を最初から与える事が出来る。ってのがあってな、それを応用して、母親が恭治を蘇生したんだ。まぁこのプロジェクトFをさらに向上したおかげでクローニングされる実験体の人格がみんな一緒だったんだな、おかげで意識の結合のときオレは疲れることなく楽だったな。」

「・・・・・・・・・・・最後のほうめんどくさくなったでしょ。」

「・・・・・・・・・・・・うん。」

「・・・・・・・・・・・・わかった。」

「・・・・・・・・・・・・まぁ、納得しろとはいわないが理解はしてくれ」

「・・・・・・・・・うん。」

一応わかってくれたのか
部屋から出て行った。

そういえば、ファリンどうすんだよ。

家もボロボロだぞ。

まぁ、すずかも純粋な人じゃないからな。

早くねよ。

第3話　聞いてないぞ（後書き）

すずかの家にはつきものですよね。

襲撃って。

第４話　２日連続で襲撃かよ

唐突に来るものだな。・・・・・・終わりってのは。

ちょっと残念って感じるようになったのは、俺が弱くなったからなんだろう。

昔なら、どうでもいいって思っていただろうに。

仕方ないのかな。俺も所詮ベースは人間だし。

だが、まだおわらんよ。

誰でもなく俺のために・・・・・

――――――――『故にオレはバケモノ』第４話――――――――

昨日の襲撃でボロボロになっていた家は朝起きたら直ってた。

新品同様に。

さすが金持ち。びっくりびっくり。

ほんと、いつの間にやったんだか？

昨日イーターで喰った男の情報によっていろいろわかったのはいい

が、

予想通り、すずかの一族にはなにか混じっているらしい。

身体能力もオレや恭治には及ばないものの、並の人間とは比べられない。

ただ血を吸うから吸血鬼っていうのは安易に決定しすぎだがな。

でも血を吸うのは事実だしな。

そういえば、すずかはどうしているんだろう？

起きてきたらすずかに聞いてみよう。

それまで自分の体のことを整理しなきゃな。

昨日の戦闘でわかったがやはりオレの魔力が日に日に低下し始めている。

しかも、再生能力に至ってはほぼなくなっているといってよい。
アルターも分解や構成する時間が大幅に伸びている。
これじゃ、次の戦闘では勝てない。

どうしたもんだか。

―ＳＵＺＵＫＡ　ｓｉｄｅ―

昨日の家のいざこざに恭治や創路を巻き込んでしまった。
それから、創路くんたちの出生の秘密を聞いて、
悩みながら恭治くんと一緒に寝てしまった。
創路君は昨日夜の一族を正しく理解したって言ってた。
これで絶対にばれたってことになる。

創路君がいくらどうでもいいって言ったって、
正しく理解した今はどんな反応するかわからない。
ただ怖い。
今の幸せが壊れるのが怖い。
また一人に戻るのが怖い。
まだ起きたくないな、
「まま～。おきよ。ごはん、ごはん」
昨日聞いた後だと恭治君を見る目が変わると思っていたケド
この子を見ているとそんなことどうでもよくなる。
「まま、ごはん～」
早くご飯食べたいみたい。仕方ないかな、ウジウジ悩んでていても
仕方ない。
－ＳＵＺＵＫＡ　ｓｉｄｅ　ＥＮＤ－

「お、降りてきたか。早く食べよう。いいかげん腹が減った。」

「・・・・・・・創路君」

「ぱぱ～」

「「「では、いただきます」」」

カチャカチャ

「そういえばさ、すずか」

「・・・・・・・・」

「おい、すずか？」

「・・・・・・・え、へっ？」

「いやな、すずか。さっき、ふと思ったんだがおまえ血とかどうしてんの」

「・・・・・・え？血？血は輸血パックから。一応うちにいっぱいあるから」

「へ～。大変なんだな、お前も」

「・・・・へ？それだけ？」

「え？うん、それだけ、いや～今までファリンあたりから吸ってたのかと思ったけど、今まで見たことなかったからさ」

「そんなことしませんっ！」

「わ、怒るなって。ただ可能性を言っただけなんだから」

「まま？どうしたの？」

「ううん。何でもないよ・・・・・・とにかく、血は輸血パックから吸ってるの。」

「わかった、わかった。この話はおわりな。さっさと食べよう」

「ほんとうにそれだけ？なんでもっと聞かないの？」

「あぁん？他にって何聞くんだよ。もしあの、夜の一族のことを言っているのならどうだっていいんだよ。言ったろ昨日正しく理解したって」

「・・・・・・そうだけど。何も思わないの？」

「べつに～。お前もしかして自分がバケモノだと思ってる？もしそうだったらふざけるなよ。オレから見たらお前の一族はただ血を吸う人間ってだけだな」

「へ？それだけ？」

「そ、それだけ。正直どうだっていい。」

泣きだしやがった。泣きだしがったよぉ、こいつ。

「お、おい何泣いているんだよ。」
「ぱぱ、ままを泣かした。いけないんだ～」
「ば、馬鹿おれじゃねーよ。こいつがいきなり泣きだしたんだよ。」
「・・・・・くすくす」
「今度は笑い出したよ。いそがしい奴だな、おまえ」
まったく、なんなんだよ、こいつは。
しかし、魔力が全然戻らないよな。

―???side―
っな、なんだこの魔力反応は?!
「おい、シグナム、行くぞ」
「あぁ」

―???side　END―

ピンポーン

「はぁ～い」

ファリンいたんだ。

「すみません、こちらはすずかさんのお宅でしょうか？」

「えっと、そうですけどぉ、どちらさまでしょうかぁ？」

「すみません、わたくし八神シグナムと申します。すずかさんの友人である八神はやての親戚です。」

！！！

八神って言うのは、たしか管理局のやつだな。

すずかもわかっているようで目で早くにげろと訴えてやがる。

「・・・・チッ、恭治逃ゲルゾ」「・・ぶぅ、わかった」

「はぁ、それでどういったご用件で。」

「こちらに私たちが探していたものがあるかもしれないのですが、お邪魔させてもらってもいいでしょうか？」

「え？それは、私ではちょっときめられないんでぇ、すずかちゃんに聞いてきますからすこし待っててくださいねぇ」

「・・・・（ヴィータ、なにか見つかったか）わかりました。」

（こっちにはなにもねーぞ、あるならそっちだ）

（わかった）

「すずかちゃん、どうしますぅ。あれ、創路君たちはどうしたんですか？」

「ファリン。少し話してくるから食器のかたずけお願いね」

「ふぇ・・・・はい」

「月村すずかです。こちらに探し物があると聞いたんですが」

「はい、それで家の中にお邪魔させていただきたいんですが」

「・・・・その探しているものを、教えていただきますか」

「それは、お答えするわけにはいかないんですが、すぐに済みますので」

「今ちょっと、家に人を上がらせるわけにはいかないんですけど・・・・」

「どうしても必要なことなんです、お願いできませんか」

（シグナム、まだ見つからないのか）

（思いのほか、立ち入るのに手間取っている）

（あ～ぁ、もう強行突破しちまえよ）

（だが、主のご友人だ。手荒なまねはできん）

（じゃ、どうするんだよ）

（・・・・・・仕方ないな）

「できれば手荒なまねはしたくなかったんですが」

「え？うぅ」

ドサッ

「・・・・・いくぞ、ヴィータ」

「おうよ」

「な、なんなんですか、あなたたちは、キャ」

ドサッ

「やべーな、おい。逃げるにしたってどうする」

とりあえず恭治を隠すのが先決だな。

「恭治、たんすの中に隠れてろ」

「くらいのやだ〜」

「知らん。かくれていろ。」

「ぶぅ〜」

いやいや言いながら隠れるなんて、お前もなかなか俺に似ているな。

「さて、どうするかな。」

完全にオレのミスだな。

さっきの一時的な魔力放出がよくなかったな。

すっかり緩んでたな。

…………………………これ以上、すずかにも迷惑かけられないな。

迷惑？

そんなこと思うようになったなんて

やっぱり変わっている。弱くなっている。

ココロなんて否定していたが、あんがい俺にもあったんだな。

だったら何かを守るときに強くなるんだっけ？

だったら、弱くなった俺が恭治と、ついでにあいつも守ってやるよ。

だから負けてはやれん。

「そのためにも、迎え撃つ」

「貴様か、さっきの魔力放出は。何者だ、答えろ」
（ヴィータ、本局のデータと照合しろ）
（わかった）

「毎回毎回、質問しやがって、俺に質問すンじゃねーよ」

（シグナム、わかったぞ。実験体６６６、研究所の研究員および武装隊の戦闘員の殺害の容疑で手配されている）

「実験体６６６か」

「ほら、わかってること質問してんじゃねーよ。時間の無駄。消費される酸素の無駄。何一ついいことなんてないぞ」

「貴様を研究所の研究員および武装隊の戦闘員の殺害との容疑と脅迫罪で逮捕する」

意味の分かんねーの追加しやがって。

「できるんならやってみな、行くぞ「絶影」」

「なんだ、それは！」

敵はもう一体いるはずだしな、相手の能力はわからんが絶影にそっちをやらせるか。

「いけ、絶影」

さて、と

「おまえの相手は俺だ」

「貴様なぜ、もう一人いるのがわかった。」

「どこにわざわざそんなこと教える馬鹿がいる」

「だったら力づくで聴くしかないな」

「まったく、短気だねぇ」

まだ完成したばっかだったから使いたくなかったんだがな、

今朝ようやくオレの研究が形になった。

おれだけの刀「双爪」。

それを手に取る。

「だけど、ちょうどいいや。時間の無駄が省ける」

「うぉおおおおおお」

こちらに突っ込んでくる。

まったく馬鹿はただ一直線ってね。

何とかさばく。

・・・・・・・・やはり、体が鈍い。

双爪を逆手に取る。

めんどくさいが

「決めたことを曲げるのはいまよりめんどくさそうになりそうなんでな。徹底的につぶす」

桃髪に廊下の壁を使いながら突っ込み、さっき絶影を構成する時に作った穴から押し出す。

「クッ」

どうにか外に押し出したか。

「二夜連続で家がボロボロはシャレにならないんでね」

「ふん、まぁいい。」

「おらぁ、行くぞ」

突っ込む。

切る。

蹴る。

殴る。突く。

「クッ」

相手の息を止めるまで止まらない。

どうにかおれの攻撃をさばき、やつが何とか体制を整える。

「レヴァンティン」

『ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ』

カートリッジか。

何か来るな。

「紫電、」

「一閃」

「わざわざ、この刀の形状がこうなっているんだ、意味はある。」

双爪の二枚刃の間に相手の刀を受け止める。そのまま刀を軸に回転する。

やつの刀が飛びあがる。

「これで貴様は無力だ。」

「ふん、刀がなくても戦える」

殴りかかってくる。

仕方ない殺すか。

斬ｒ「うらぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

ガツン

「グハッ」

後頭部からの衝撃。

聞き覚えのない声。

もう一人のほうか、
絶影はどうした。

向こうで破壊されているな。

チッ、思いのほかあいつらは強かったみたいだな。
頭への衝撃が強かったみたいだ。意識が飛びそうだな。

「絶影、限定解除」

拘束が解け真の絶影が表れる。

ふらふらだ、一撃でこんなにボロボロになるとはな。
あと、一撃分だな。持つのは。少しだが理解できた。
オレじゃないオレが来る。
どうにかもちこたえないとな。

まったくいつの間に刀拾ったんだあの桃髪。
仕方ないかね、まだまだ戦いは続きそうだ。

―ＳＵＺＵＫＡ　Ｓｉｄｅ―

うううぅ、

いきなり殴られるなんて。
とにかく立ち上がらないと、

外で音がする。
多分、創路君だ。

戦っているのね。

ふらふらしながらどうにか外に出るドアまでたどりつく。

………創路君………………
……

―SUZUKA side END―

まったくどういうことだろうね。

やつが近づくまでの時間が少し延びたぞ。

「おい、シグナムやばいぞ。こいつつえー」

あたりまえだろ、拘束具はずしたんだから

これで弱くなったらオレ泣いちゃうね。

「なんとか持ちこたえろ、こいつを仕留めたら行く」

やばいね、あちらは余裕がありそうだ。

もう目も霞み始めている。

だがここで倒れるわけにはいかん。

さっきから切り刻まれるだけ。

だが倒れん。

もうすでに機能しなくなっている手に魔力を流し込み強制的に動かせて双爪を握る。

刀にあらん限りの魔力を込める。

「貫き通す、一の型、通爪」

「紫電一閃」

左手が落ちる。斬られたか。

殺傷設定かよ。

困ったね。

ただでさえ血が足りないのに。

どうにかやつの左肩を抉ったみたいだ。

「クッ、きさまぁぁぁ」

こちらに突っ込んでくる。しかも突き。

あらら。これはだめだ。だが、もう時間は十分稼いだ。

「はぁぁぁぁぁぁ」

「だめぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」

ブスッ

え？

おいおい？

は？

マジかよ。

「おい、すずか。すずかっ」

「……ま……もれ……た……か……な……」

「守れた。守れたからもう喋るな」

「ね……そ……うじ……く……ん……」

「もう喋るなって」

「わ……た……しね……そう……じ……く……ん……の……こ……と……が……だ……い……す……き……」

「……おい……おい……すずか……すずか……すずかぁ……すぅずぅかぁぁあああああああああああああ」

「間に合わなかったか」

・・・・・・・もう時か間

「守るべきものに守られて、しかも守れなくて消えていくだけなんて、俺は最低の分身体だな」

「大丈夫だ。すずかはおれが救う。安心しろ」

「そうだな。そうだったな。できるな。頼んだぞ」

所詮、分身体か。いい夢だった。でもおれが告白うけた身だもんなぁ――――

「貴様、何者だ」

「ふん、さっきまで戦っていたやつの名前も知らんのか」

「実験体６６６」

「そうさ、そしてお前を殺すものだ。せいぜい、あがけ。オレはいま機嫌が悪いんだ」

「クッ」

赤いチビはつぶした。

「次はお前だ」

イーター発動

「クッ」

「喰らってやるよ」

「ぐぁぁ」

やつの左腕を食らうことに成功。

「次はどこを喰らおうか」

「クッ、レヴァンティン」

赤いチビを抱えて逃げたか。

「すずか、おい、すずか」

もう意識がないか

あまり本人の確認なしでやりたくないが。

自分の手を切って血をすずかの口に流し込む。

続いて魔力を流す。

傷はどうにかふさがり始めた。

「これで死ぬことは無くなったな」

ふぅどうするかな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第４話　２日連続で襲撃かよ（後書き）

やりました。やっちゃいました。

すこしはしょりすぎてわかりにくいかな。

一応説明みたいなのを加えます。

創路は最初のすずかの交渉の後に魔力で自分の分身体をつくります。（ＮＡＲＵＴＯ　の影分身と似ていますが違うのは分身体から本体に随時情報が送られることです。）

本体は世界を旅し武術などを学びます。また、管理局の影響を調べてました。

この後どうなるんでしょうね

感想、指摘、評価などお待ちしております。

第5話・前　かわったなぁ

おはようございます。

ひいらぎきょうじ、４さいです。

ままがねたまんまになってから1ねんたちました。

ぱぱがちきゅうのびょういんでなおせるところをさがしていたんですけど

みつからなくて、ここにきました。

ここにいればなおせるらしいです。

おきたら、かおをあらって、はをみがきます

おわったらみんなでごはんをたべます。みんないっぱいたべます。

ぼくもいっぱいたべます。

たべおわるとぼくとおにいちゃんがしょっきをあらいます。きょうはぼくとおにいちゃんのとうばんです。

それがおわるとぼくはままのところにいきます。

ままはずっとねたまんまです。でもぼくはぱぱならなおせるとおもいます。

だからぱぱがなおせるまでぼくがままにいつもなにがおこったかいつもおしえてあげます。

そのあとおべんきょうします。おねえちゃんたちは、おにいちゃんたちとくんれんしてます。

おひるになったらおひるごはんたべます。ごはんはぱぱがつくります。ままにもたべさせてあげたいです。

おひるのあとはおにいちゃんとあそびます。ここにはぱぱとぼくとおにいちゃんとどくたーしかおとこのこがいないんでとてもだいじなじかんです。きょうはよるまであそびました。

よるになったらごはんです。ぼくはおなかがへってたのでいっぱいたべました。

ねるまえにおかあさんのところにいっておはなししました。

はやくおかあさんよくなりますように

―side Erio―

僕と兄さんの出会いは半年前にさかのぼる。
兄さんは当時研究所をつぶしながら回っていて、そんななか僕を見つけたらしい。
僕はある夫妻の死んだ息子のクローンなんだ。
それがばれたから連れて行かれた
いまぼくはあの人たちとちゃんと会話できるだろうか？
まぁいいや、とにかく兄さんは僕をみつけたんだ。
その時僕に”何でここにいるんだ”なんて聞いてきたんだ。
“実験されてた”って答えたらそうかだってさ。
それで帰ろうとしたから、”僕は殺さないのか”って聞いたんだ。
兄さんは研究員を皆殺しにしていたしね。僕は僕も殺されるものだと思っていたからね。
にいさんは僕に”殺されたいのか”って聞いてきたんだ。
そしてぼくは答えたんだもう実験はいやってこと、クローンだってこと、そしてなにより帰る場所がないこと。
にいさんは“だからどうした。おまえは今の現状を不幸だって嘆いているだけだ。刃向かったのか？その現状に。その運命に”なんていって、ぼくはおもったんだ、何も知らないくせにって。おもわず

殴りかかったんだ。今思うと命知らずだよね。

そしたら、にいさんが受け止めて”なんだ、ちゃんと刃向かう意志はあるじゃないか”っていったからないちゃんったんだ。しかたないよ、誰か僕をほめるなんて長い期間なかったことだったから。

その間、にいさんは僕は泣いたからあたふたしてた。

「教えてやる、代わりのいない人間なんていないんだよ。おれはテメーの代わりはできる。おめーだって俺の代わりになる。だがなオレはテメーにはなれない。テメーはてめーなんだろ。」

その言葉が僕には響いたんだ。僕がエリオ・モンディアルのかわりに生きるのは可能だけど、ぼくは今までそうやって生きてきた。

エリオ・モンディアルの名を語りながら生きてきた。

だけどそのエリオ・モンディアルのかわりをしている“僕”はだれ？その“僕”はちゃんと“僕”らしく生きてこれただろうか？多分何一つ僕は僕としてしていない。

僕はまだ名前すらない、はじまってすらいない。

だから僕が僕らしくあるために

「連れてってください」

この選択を僕は後悔しないだろう。

兄さんがしぶしぶ連れていってもらったところは一般的にいう悪の組織だ。

でもぼくを助けたのはそんな犯罪者だ。正義の味方じゃない。

それにそんな悪の組織だって僕にはすごく居心地がいい。

名前も今は柊エリオって名乗っているんだ。

いつまでモンディアルの子ではいられないってね。

兄さんに頼み込んで柊の名前を名乗らせてもらった。

兄さんもじつを言うと実験体なんだ。兄さん自体はどうでもいいらしい。

あとドクターがぼくのクローン技術を作り上げた人ってのは驚いた。

そんな人がへんな笑顔で

「ようこそ、僕の研究室」

なんて言ったもんだから、僕マウントポジションとって殴っちゃった（へへッ

まわりはあきれた目で見てたよ。毎回こんな感じなんだろうか。

あとでドクターが笑顔の練習をしているのを見た時はさすがに罪悪感がわいたけど。

あとこれが一番うれしいんだけど

僕にも兄弟ができたってこと。

お姉さんがいっぱい出来た。あと弟も。

兄さんの甥なんだけど、恭治って言って、すごくいい子。

毎日眠り続けているお母さんと話すのを欠かしたところを見たところがない。

毎日お昼を食べた後一緒に遊ぶんだけど、ときどきお姉ちゃんたちが混じってきて

最終的には超次元サッカーみたいなのやってる。

今度あの人たちと一度話してみよう。

僕は、今自分で選んで、ちゃんと僕として幸せに生きている。

すべてのきっかけは兄さんだったんだ。

―ｓｉｄｅ　Ｅｒｉｏ　Ｅｎｄ―

―ｓｉｄｅ　Ｊａｉｌ―

一年前だね。彼は僕のもとに来たのは。

そのころ僕は自分の作られた意義に苦しんでいたんだ。

無限の欲望なんて御大層なコードネームをつけて僕は生み出された。

生命操作技術の確立を目的とするように遺伝子的に操作されてね。

最初は欲望を満たせるからよかったよ。

だが、評議会からの依頼はとてつもないものだった。

僕は一応やっていいレベルとやってはいけないレベルぐらいわかる。

その線を超えずに向こう側の結果を求めるのが科学者だ。
まぁ、その線の手前でも十分世間的には違法研究なんだけど。
とにかく、やらないと僕と娘たちの安全の保証がなされない。
そんなジレンマを抱えながらここ数年僕は生きてきた。

そんな時だ彼が来たんだ。女性の入った生体ポッドを抱えて。
彼は僕にその女性を直すことを依頼してきた。
正直僕はイライラしてきたんだ。僕が苦しんでいるのにそんなこと言ってきた彼が、憎かった。

「そんな依頼ぼくが受けると思うのかい？」

むかついたんだもん。仕方ないじゃん。

「お前ならできるだろう。できなくてもいい。お前のところの機器を使わせろ。」

それにこの高圧的な態度。

「犯罪者に頼むことかい、それは。」

「たとえ犯罪者だろうとテメーがいるおかげで人一人救えるっていう事実は変わらない。他の誰でもなくお前だけが助けられるんだ。」

「・・・

彼が来てから生活も一転したんだよね。

今までの食事はカロリーや栄養摂取だけを目的としたレーションだったんだけど

彼は子供にそんなものは食べさせられん、とか言って自分で作り始めたんだ。

今じゃ娘たちの何人かが彼から習ってローテーション組んでいるよ。

食べる時も作法とか気をつけてね。

もうクアットロなんて最初反発してたのに恭治君に言われたらころっと意見を変えてさ。

ちなみに恭治君は我が娘みんなから愛されているね、恐ろしいくらいに。

仮にも僕が創造主なのに、最近娘たちが冷たいんだ。

でも

今の生活も悪くない。理解者も得たみたいだしね。

スポンサー様のご機嫌取りもうっとうしいけど、計画実行までの辛抱だ。

第5話・前　かわったなぁ（後書き）

今回は他の連中に焦点をあてて書きました。

少し無理があったかな。

とにかく、感想、評価、指摘などお待ちしております。

第5話・後　出かけますかね（前書き）

久しぶりの更新です。

第5話・後　出かけますかね

あの日からすでに一年近く経っている。

魔力で分身体を作り出し、すずかの家から飛び出て世界を回っていた。

いろいろなものを見た。何もかもが新しく新鮮だった。

だが結局オレは光さんとの約束を守れてないんだ。

なにせ恭治はオレが育てているんじゃない。

分身体から得られるのは情報だけ、実感はない。

だから戻ったんだ。

だが戻った時にはとても恭治を育てる環境ではなくて、

久しぶりに見たすずかは傷ついていて

残っていたのはおれの過ちの証だけだった。

――――――『故にオレはバケモノ』第５話・後――――――

すずかに何とか魔力を流し込んだ。

リンカーコアを持たない彼女にこの行為は危険なのだが、今はそんなことを言ってられない。

結果として傷はふさがったが意識がいまだに戻らない。

とにかくすずかを家に運んで、ファリンと恭治を起こす。

恭治は母親が眠っていると思っているようだ。

ただファリンはひどく取り乱していた。仕方ない。

寝ている間にすずかが倒れたんだから。

ファリンを落ち着かせていろいろ話した。

おれたちのこと

倒れていた間に起こったこと

当然怒るものだと思っていたんだが

すずかが決めて行ったことならいいらしい。

ただ今のすずかの体は非常に危ない。

傷は無いがデリケートな部分は今の俺や地球の技術じゃ出来ない。

そのことをファリンに伝えおれは一つ提案した。

違う世界なら治療できる可能性があると。

今の地球の技術で治療できないんだったら他の世界で治療すればい

い。

ただ、その際に管理世界はだめだ。

理由は三つある。

―おれが追われている。

―すずかの体の問題。最悪利用される可能性だってある。

―管理外世界で一般人を傷つけたという事実をやつらは認めようとしないだろう。

ファリンは二つ返事でＯＫを出した。

すずかの姉にはファリンに説明してもらう。適当にごまかして。

たしか、夫が管理局で働いているやつの兄らしい。

おれがそいつらと話して逆ギレでもされたら面倒だ。

あとは、アリサのところだ。こいつにすべて話すかは正直迷っている。

すずかの今までの生活がある。それが治療後に無くなっているのはだめだ。

それに、すずかがいなくなった後の事後処理はファリン一人だけは少し荷が重すぎる。

つまり、アリサにも協力してもらおうって考えもあるわけだ。

ただこいつは管理局の連中と“トモダチ”だ。そんな奴を果たして信用できるか。

うっかり口を滑らせたらとんでもないことになる。

仕方ない、口止めしておくしかない。こいつが一番すずかと仲がいいのは事実なんだから。

はぁ、説得がめんどいな。

―ｓｉｄｅ　ＡＬＩＳＡ―

昼過ぎに創路が訪ねてきた。

非常にめんどくさそうな顔をして。

なんかむかつくわねぇ

すずかの家で、職がなくて困っているからって言うもんだから、

雑用にでも使ってあげよう、とか思って雇ったらあり得ない処理スピードで職をこなすもんだから、ついつい調子にのっちゃって私の仕事も回したりしたんだけど

金もちゃんと払ってるのに、この前変な要求してきてね。

私の親しい人間に自分のこと話さないでくれって。

理由を聞くとはぐらかすものだから私の数日分の仕事回してやった。期限付きで。

後日、すずかに聞いたら知ってたみたいでちょぉっとイラってきたものだから倍に増やしてあげたのよね。

それでも間に合わせるんだからバケモノよね。しかも出来が私がやった場合よりいいしね。

「おい、アリサ聞いてんのか？」

「・・・・えっ？」

「はぁ、聞いてなかったのか。すずかが倒れた。」

「！っなんですって」

「倒れたというより刺されたんだがな。傷はちゃんと治療したから大丈夫だが意識が戻ってない。」

「どうしてよ、どうしてすずかが刺されなければならないのよ。」

「・・・・・これから言うことは他言無用だ。絶対にだ。」

「なによ、まぁわかったわ」

「仕方ない説明するか。簡単に言うとおれと恭治はある研究室を抜け出してきたんだ。だがその過程でおれら、特におれは管理局に追われることになった」

「えっ、それってなのはたちが」

「そうだ。お前やすずかの友人がいる組織だ。おれはそこに次元犯罪者として登録されている。」

「あんた、なにしたのよ」

「研究所から抜け出す時に研究員を皆殺しにしたんだ。とにかくおれたちは追われていた。この世界に落ちてきたのは本当に偶然だった。そこですずかの庇護下に入った。この世界は管理外世界らしい、だからなのか追手が来ることもなかった。」

「じゃあ、じゃあなんですずかは傷ついたのよ」

「・・・・さっき言ったお前の友人に八神はやてっていうやつはいるか？」

まさか

「そんなの関係ないでしょ」

「関係あるから聞いているんだ。いるんだな」

「そうよ、いるわよ」

「じゃあ、そいつの親戚と名乗るやつらは知っているか」

「一度あったことあるわよ、昔」

「そいつらだ。」

「えっ？」

「そいつらが俺たちを見つけ攻撃してきた。その中ですずかはおれをかばい刺された。」

「・・・そんな。」

「しかもおれらを襲ったのは人間体じゃない。あれはかなり高度なプログラムだ。本来プログラムは自律行動できないんだ。だがやつらのそれはまさしくそうだった。だが、やつらは誰かに忠誠を誓っている。多分お前の友達の八神はやてだろう。」

「う、嘘よ。そんなことない。はやてがすずかを傷つけるなんて」

「別に今回のことは八神はやてに認知してないだろう。襲ってきた

やつらも他の任務の帰りだったらしいしな。だがな認知してなくともプログラム体を使役しているんだ。責任はあるだろう」

「そう、そうだけど、だからって」

「その辺の論議はどうだっていい。すずかのことだ。今のすずかは危ない状態だ。体の治療は出来ているが、実際には意識がない。つまりどこかに損傷があるんだ。原因が分からないがおれが治療できるレベルはこの世界のレベルと少なくとも同じくらいある。だからどこか他の世界で治療することにした。」

「待ってよ。そんなのやってみなくちゃ分からないじゃない。うちの系列の病院で治療してみれば治るかもいしれないじゃない。」

「もうすでにすずかの専門医に見せた。知っているだろう？あそこの家は特殊なんだ。普通の病院では治療できないだろう。」

「でも、それじゃ。すずかは・・・・・」

「お前に頼みたいことがある。すずかが起きた時にこの世界に帰れる場所を作っといてくれないか。おれにはできないことだ。・・・・・・・あと、俺のことはすずかが起きるまでお前の友人に言うな。あまり言いたくないんだが、そいつらとも仲良くな。すずかが帰ってきたときにお前らの仲が悪いと困るだろうし。」

「・・・・・・・・わかったわよ。・・・・・・・・さっきからすずか、すずかってあんたは帰ってくるんでしょうね。あんたはいなくなったらあの子悲しむわよ」

「どうだか・・・・案外、疫病神とか思っているかもしれないぞ」

「そんなわけないでしょ。あの子はあんたが好きなんだから」
「…………………………あいつも変な趣味をしている。まぁこのままだと後味が悪いからすずかを治しにいく。じゃあな」
「素直じゃないわね」
「ふん、今に始まったことじゃない。それにそれをあんたが言うな」
結局あいつと恭治とすずかは異世界に旅立った。
見送ったのは私とファリンだけ。もっともあいつに他に知り合いがいるとは思えないけど。
「すずかちゃん、治るでしょうか」
「少なくともあいつがいるんだから大丈夫でしょ。なんだかんだいってやるんだから」
「そうですね～。創路君もアリサちゃんとおなじでツンデレですから」
「うるさい。さぁ、ファリンすずかがいつでも帰ってこれるようにするわよ」
「は～い」
―side ALISA end―

―ｓｉｄｅ　ＨＡＹＡＴＥ―

シグナムとヴィータに任務が出て地球に向かって数日。

任務の内容は地球に落ちたロストロギアの回収。

しかし、ほんまに地球はよう魔導関連に巻き込まれるなぁ。

今日には帰ってくるはず。

昼過ぎやった、いきなりヴィータが私の部屋に飛び込んできたのは

「はやて、シグナムが、シグナムが」

「どうしたんやヴィータその傷、シグナムも・・・・」

なんやこれ。肩が抉れとる。左腕がない。しかも斬られたんとちゃう。これは引きちぎられたあとや。

「と、とにかく、はようシグナムを医療室に。ヴィータ、シャマルを呼ぶんや」

「わ、わかった」

「ザフィーラ、シグナムを運ぶの手伝って」

「了解」

ふぅ、一時はどうなるかと思ったけどどうにかシグナムの容体を落ち着いたようや。

しかし、ヴィータに聞いた話やと任務の帰りに魔力反応があって、そこで犯罪者と戦ったってことらしい。

しかも、そこがすずかちゃんの家やったらしい。しかもその犯罪者は（実験体６６６ゆうらしい）なんや特殊な能力を使ったらしい。ただヴィータは途中でやられたらしい。目覚めたときにはほとんど意識がないシグナムに抱えられたらしい。なんやようわからんことばっかやな。

すずかちゃんは知っとったんかな。実験体６６６が犯罪者やってこと。

「はやてちゃん、シグナムがおきました」

「そか、ほなちょっと話すから二人きりにさせてな」

「えっ？わかりましたけど」

「ありがとうな」

部屋に入るとシグナムがなんやようわからん機械につながれとった。左腕もなんとか再生したらしい。

「シグナムもう大丈夫なん？」

「主はやて、すみません。心配をかけました。」

「ええんよ。それでな、できればなにが起こったのか教えてほしいんやけど」

「・・・はい。我々は任務終了後に膨大な魔力反応があり、その場所に直行しました。そこが主のご友人の月村の家だったので訪ねたんですが。」

「ですが？」

「外はヴィータに探させてないとわかったので、家の中を調査したいと言ったんですが頑なに家には入れたくないと言われました。」

「そか、やっぱりすずかちゃんは何か知っとったのかな？」

「はい。そのあと強行突破しました。主には悪いと思ったのですが、ご友人にはすこし眠ってもらいました。」

「ちょいまった。シグナムなにしたん。まさか」

「はい。ですがこのまま放っておいて、被害でも出たらと考えました。」

「そか、じゃあしゃあないな。あとですずかちゃんに謝りに行こうな」

「・・・・・・そのことなんですが主。実験体６６６が強敵だったので私は殺す気で戦いました。そうでもしなければ私は死んでいたでしょう。そしてどうにか止めをさそうとしたんですが、ご友人が間に入りまして結果として私は彼女を刺したことになります。」

「なんやって！ですずかちゃんはどないしたん。まさかそのままにして逃げてきたんじゃ」

「我々が戦っていたのは分身体だったらしいんです。そのあと本体がでてきたんです。どうにか戦ったんですがヴィータがやられてしまい、私もやつの攻撃で左腕をやられまして、このままでは二人と

も死ぬことになると判断し撤退しました。」

「それやったら、すずかちゃん今もその実験体666と一緒にいるってことやろ。すぐに地球行くで」

「主、気をつけて。やつは我々とはなにか違います。」

「?わかった」

・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・
・・・・・
・・・・
・・・
・・
・

まさか地球に行く手続きで時間を食うとは、今度誰かに専用のゲートを作るの手伝ってもらおうか。

とにかく、いまはすずかちゃんや。

急いで私たちはすずかちゃんの家に向かった。

「あの、私八神はやてですけど」

「・・・・・・なんのようですか？また何か壊しに来たんですか？」
ヴィータをめっちゃっ睨んどる。無理もないか。
「あの、話がしたいんですけど」
「こちらはありません」
「でも、すずかちゃんは大丈夫なんですか」
「あなたたちにそんなこと言うことができると思っているんですか」
「！？まさか、すずかちゃんはどないなったんですか？」
「まさか、人が刺されて大丈夫なわけないでしょう。」
「そんな」
「彼女たちこう言って訪ねてきたんですよ。『すずかさんの友人である八神はやての親戚です。』って。そのあと私たちの生活を壊した」
「別にそんな目的があったわけやなくて、ただ犯罪者を捕まえるつもりで」
「でもあなたたちはすずかちゃんを傷つけた。もうすずかちゃんは目覚めないかもしれないんですよ、どうしてくれるんですか。」
そんな、すずかちゃん・・・・・・・・

「そこらへんにしときなさい、ファリン」

・・・・・・・・・・アリサちゃん

「アリサちゃんはなんでおるん」

「どっかの馬鹿が私の親友を傷つけてね。彼女の治療中にわたしがいろいろしなきゃいけないのよ。」

「シグナムたちはやりたくてやったんやない。」

「そんなの関係なわよ。過程なんてどうだっていいのよ。ただあんたの家族とやらが私の親友を傷つけた。それが事実なだけよ。」

「すずかちゃんはどないしたん。」

「ここにはいないわよ。それにもう私たちは知らないしね、どこにいるかなんて。」

「まさか、実験体６６６が連れ去ったん」

「いいかげんにしなさいよ、はやて。あなたはあいつのこと実験体６６６としか呼ばないけどあいつにはちゃんと柊創路って名前があるのよ。それにあいつのこと何も知らないのに喋らないで。少なくとも私たちはあいつを信じてるし、すずかだってそうよ。」

「けど騙されているだけかもしれんやないの。利用してただけかもしれないやん」

「そうね、少なくとも最初のころはあいつはすずかを利用する気だったでしょうね」

「それやったら」

「でも今は違う。あいつが何で逃げずにあんたんとこの馬鹿と戦ったと思ってるの？あんたらからすずかを守るためよ。なにせ相手はすずかを傷つけたんだから」

「そんなことせん。ただ犯罪者を捕まえるだけや」

「犯罪者、犯罪者うるさいはね。それだけの理由であんたはすずかから家族を取り上げるの？」

家族？

「家族やないやないか。それにすずかちゃんにはちゃんとお姉ちゃんがおるやん」

「何もわかってないのね。あんたもなのはもフェイトも結局何もわかってないのね」

「なんなん、アリサちゃん。言いすぎやで。私たちはすずかちゃんのことわかってる。」

「いいえ、なにもわかってない。あんたたちが管理局で働くようになってから、特になのはなんて魔法にのめりこんでたしね、すずかがどんな生活を送ってたか。唯一の肉親の忍さんは恭也さんと結婚してドイツに行ってノエルもそれについて行ったのよ。今まで家にいた人数が半分になって、それに加え友達とは普段はあんまり会え

ないんだから。すずかはね、寂しかったのよ。だからわたしは極力すずかと一緒にいた、でもね私だって私の都合がある。そんなときにあいつがきたのよ。あまり人付き合いがよくないけど、それでも最近はすずかたちと仲良くやってたんだから。すずかはね最近よくきれいに笑うようになったのよ。そんなこと知らないでしょ。別にいいのよ、あんたたちが仕事にうちこむのは。あんたたちが選んだんだから。でもね、その結果私たちにはほとんど会えなくなったじゃない。ここ数年なんてほんとに学校にいるのが不思議なくらいよ。それなのに私たちのことわかったような顔しないでよ。友達っていう理由だけじゃわからないものだってあるんだから。」

「そんなん、すずかちゃんが逃げただけやないの。寂しいのがいやになって、あんな犯罪者と一緒に生活なんてして。それにアリサちゃんだって知ってたんならとめてあげんと。友達なんやから。間違ったことしてたんなら止めるのが友達やろ。」

「あのね、あんたが言えることじゃないでしょ。それ。それにすずかがなにを間違えたのよ。犯罪者だからなんて言わないでよね。創路は今のあんたよりずっと好感が持てるわよ。あいつの罪なんて情報でしか知らないんでしょ。」

「なんでわたしがいったらあかんの？なんで？」

「あんたの家族とやらはどうなのよ。すずかを否定なんてするのはあんた自身を否定するのと同じじゃないの？」

「私の家族は犯罪者やない！！」

「それじゃあ、5年前のあれはなんだったのよ。なのはもフェイトも実際は戦ったんでしょ。なのに犯罪者じゃないってふざけるのも

大概にしなさい。」

「そ、それは、でもフェイトちゃんもなのはちゃんも許してくれたんや。罪はちゃんと償っとる。」

「あのね、犯罪者は死ぬまで犯罪者よ。たとえ許されたってね。罪を犯した者というレッテルは絶対にはがれないんだから。」

「そんなことない。」

「それにあんたの家族は人間じゃないんですってね。創路によるとあんたの家族は戦うためだけに生み出されたプログラムじゃないかですって。生き物ですらないじゃない。まぁそれも含めてあんたはそれをあんたの家族って呼ぶんでしょ。だったらあなたも同じじゃない。一人がいやだったから家族を作ったんだから」

「・・・・・・・」

「とにかく、もう帰って頂戴。あんたの考えは良くわかったわ。どうせ今日だってすずかに謝って、今回のことはなかったことにしたかったんでしょ。どうせ誤解だからって。別にあんたの考えを否定する気はないわ。ただ今回は私の親友が傷つけられたことが黙殺されようとしていた。それだけよ・・・・・別に絶交とか言ってるんじゃないわ。すずかが帰ってきたときに私たちが仲悪かったらすずかが困るだろうしね。でもよく考えるのね。あなたがやろうとしてたことを。」

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

そういつか認めてもらう。私たちが正しいことしとるんやって。

―ｓｉｄｅ　ＨＡＹＡＴＥ　ｅｎｄ―

「よぉ、あんたがジェイル・スカリエッティか。女の治療に協力しろ」

第5話・後　出かけますかね（後書き）

なんかはやてがものすっごい頭が悪くなってますね。

方言むじー

アリサともなんか険悪ですし。

しかし、魔法の依存度で行けばはやてもなのはと同じですよね。

第6話　なんか変なのがついてきた（前書き）

やばいやばい。てすとだぁぁ

第6話　なんか変なのがついてきた

ふぅ、今日も研究所潰しに行きますかね。

最近はゼストとルーテシアもおんなじことしてるらしい。

そういえば、この前はエリオが連れてけってうるさかったな。

なんでも手伝いがしたいらしいが、まだあいつには早いな。

それに“あいつ”も出てくるだろうしな。

というよりこんなことはやらない人生が一番なんだろうな、人間には。

まぁ、すずかのほうが優先順位が高いからな。

恭治も最近は隠れて泣いているし。

早くすずか治さないと。

まぁ、それすら結局おれのためだがな。

――――――『故にオレはバケモノ』第６話――――――

―管理外世界―

目の前には違法研究所。

しかし前々から思っていたんだが、なんで最近のやつらは砂漠の真ん中に研究所作るんだ？

目立つだろ。

まぁいいや

ぼちぼち始めますかな。

「絶影」

いつも通り、邪魔するものすべてを切り裂き、管理室に向かうつもりだったんだがな。

「誰もいねーじゃん、どうなってんだ？」

そんなことつぶやいていると向こう側から声が聞こえる。

「なるほど、全員で一室に集まってるのか、なんて不用心なんだ」

絶影を連れてその部屋に向かう。

まったく、いつからこんなことし始めたんだろうな。

部屋ではちいさい女性体になにか薬を打って、実験してる。

「うわぁぁぁぁ」

まったく、いままでなら無視してたのにね。

「おい、この実験何しているんだ。」

「へっ？なにって投や・・・・・誰だっ！貴様！」

「遅い。虐殺の始まりだ、ククク」

絶影に科学者どもを殺させる。

「いやぁぁ」

「く、くるなぁ」

「ひ、ひいいいい」

見苦しいねぇ。

さてと、実験体のところに行きますかね。

「おい、大丈夫か？」

「へ？」

「ボロボロだな。まったく面倒事ばっかだな。おい口開け。」

ナイフで手首を切る。

「？・・・いやぁ、いやいやいやいやぁぁぁぁぁぁ」

「まったく。血を飲めってだけだ、変なもの飲ませやしねーよ。あれ、血って変か？まぁいいや。早く飲め」

「・・・ゴクッ」

「おいおい、結構飲むのな。まぁ、いい。魔力を流す。お前、ユニゾンデバイスだな。まぁ問題ないだろ。・・・・・・多分」

「わかった・・・・っておい！多分って何だ、多分って」

「なににも絶対などないのだよ、ユニゾンデバイスくん。さぁはじめようか」

「え、え、え、え、いやぁぁぁぁ、ぁぁぁぁぁぁぁん」

お、なんか痙攣してんな。新発見新発見。

メモしておこう。他人に魔力流すとどうやら快感を得られるらしい。

「おっけ。終了だ。どうだ、治ったろ。」

「・・・・・もうお嫁にいけない」

「はいはい、んじゃ俺は行きますかね。絶影のほうも終わったらしいし」

あらら、ココってこんなに赤かったっけ？

最近絶影が凶暴化している気が・・・

「おい、待てよ」

「ふう、何だよ。お前のお嫁事情とか知らんからな」

「チゲーよ。あたしをここにおいてくいつもりかよ」

「はぁ、それこそ知らん。そんなのお前がどうにかしろ。知らん。」

「なっ、あそこまでやっといてそのままかよ、あれだな、お前絶対女をヤったらすぐぽいする人間だな」

「治しただけだろうが。」

「もういい。勝手に付いていく。」

「・・・はぁ、何でこんなんばっかなんだよ。結局良い情報もなかったし」

あれ、なんか足りないような。

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・あぁ、そうか“あいつ”がいなかったんだな。

しかし、もうあそこまで行くとストーカーだな。

餌付けしてしまったのがいけなかったな。

いやぁ、平和っていいな。

―ジェイルのアジト―

「ふぅ、帰った。」

「へぇ、兄貴も変なんところに住んでんのな」

「うるさい」

向こうから足音が近づいてくる。

「兄さん、おかえり」

「パパ、おかえり

エリオは誰かと訓練でもしていたのか汗だくだ。

ちなみに、こいつのデバイスはおれがつくった。

ある日おれの部屋に来て「デバイス作って、兄さん」なんていいやがってよ。

いやいや作ったんだが、なんか思いのほか高性能になってしまった。

まぁ喜んでいるからいいか。

恭治は本でも読んでいたのだろう。

しかし、こいつらなんで毎回帰ってきたのわかるんだ。

「あぁ、ただいま」

「うわ、兄貴子持ちかよ。絶対今の女と違う女の子だろ。」

「いいかげん、それからはなれろ」

「ぱぱ、そのちっちゃいのなに」

「あぁ、これはユニゾンデバイスくんだ。」

「そんな名前じゃない。」

「・・・名前など知らん。ユニゾンデバイスで十分だろ。」

「名前は無いけど、それはいやだ。絶対いやだ。」

「まぁいい、お前ら一応自己紹介しておけ」

「うん。ボクは柊エリオ。兄さんの義弟だよ。」

「ひいらぎきょうじです。４さいです。よろしくおねがいします。」

「あたしは、さっきこいつに体を弄ばれたユニゾンデバイスだ。ウルウル」

「！兄さん」

「していない。」

「まぁ、そんな事だろうと思ってたよ。兄さんはなんだかんだ言ってすずかさんにゾッコンだもんね。」

「うるさい」

こんなのつきあってられるか。

「行くぞ」

「パパ、きょうはごはんなにつくるの」
「なに？今日は俺だったか。仕方ない、食材を買いに行く。」
「ぼくもいく」
「ボクはいいや。まだチンクたちとの訓練が残ってるから。」
「じゃあいくぞ恭治」
さてと、今日の夜は何にするかな。

「ところで名前どうするの？」
「そうなんだよな。なんかねーか」
「え、ボクに聞く？う～ん、ないなぁ。そうだみんなに考えてもらおうか」
「みんな？」
「ここにはいっぱい人がいるからねぇ」
「ふ～ん」

近隣のスーパー。今日は特売日。おばさまの戦争が行われている。

「突然だが恭治、今日の夜は焼き肉にする。」

「やきにく？なんで」

「簡単だから。肉さえ買っていけばやつらは満足する。なんて単純なんだ」

「やさいも食べなきゃだめだよ。」

「・・・・ああ。そうだな。」

しっかりとしている恭治であった。

「ふぅ、買った買った。まったく何であんなに大所帯なんだここは。毎回毎回買う身にもなれよな」

ドアが開き、ユニゾンデバイスくんが入ってきた。

「おお、兄貴。ちょうどいい。いいことを教えてやろう。あたしの

名前が決まったんだ。」

「へぇ。あっそ。どうでもいい。知らん。あっち行け。めんどい」

「ひどっ、そうやって女を弄ぶんだな。ちくしょー」

「お前も結構めんどいよな」

「だいたいよ、なんだよここは。まったくココは。女だらけじゃねーか。ぜってー、兄貴の女だろ。変なドクターもいるし。」

「だから違うと言っている。もういい。なんなんだ。」

「へ、なにが？」

「お前の名前だよ」

「ああ、やっぱり兄貴も聞きたかったんだな。いいだろう教えてやるよ。あたしは烈火の剣精アギトだ。」

「あっそ。んじゃアギト手伝え。」

「な、なんでだよ。」

「知っているか、働かずもの食うべからずって諺」

「わ、わぁったよ。まったくなんであたしが・・・・」

ぶつぶついいながら皿並べに行った。

「あぎとえらいねぇ～。えらいえらい。」「な、なでるなよぉ～恭治」

まぁ、なんだかんだいって仕事してるしいいや。めんどいし。

第6話　なんか変なのがついてきた（後書き）

なんか、崩れ始めてる。

まぁ、なるようになるでしょ。

しかし、アギトのキャラが微妙に・・・・

第7話　止まった私（前書き）

明日から定期テスト。勉強します

第7話　止まった私

バ、バケモノがぁ

胸を一突きすれば男は黙る。

知っている。

命は壊れるものだって。

命は壊せるものだって。

命は壊すものだって。

知っている。

それを行うことが

バケモノであるということなら

オレは、まさしくバケモノだ。

管理局製のバケモノは今日も命を壊してます。

――――――――『故にオレはバケモノ』第7話――――――――

私が彼に出会ったのは、まだ執務官になりたてのころ。

あの頃私は違法研究者を取り締まることに夢中だった。得られた力で私と同じ出自の人たちを助けたかった。研究所の制圧をして実験されていた人たち救う。

舞い上がってたんだと思う。救えなかったものを救えるようになってたから。大きすぎる力を得たから。私に扱える力じゃなかったんだ。でも、それでも救いたかった。苦しんでいる人のもとに飛び立つ力があったから。私にはできることだったから。

珍しく一人での捜査だった。行きついたのは無人世界の研究所。すぐにセットアップして突入したんだ。

でも、研究所の中は地獄図だった。床には刻み込まれた人間の破片と思わしきもの。廊下も切り刻まれていた。視界に移るのは赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤。臭いも嫌悪感を引き立てるものであった。嘔吐感が絶えずに寄せてくる。今までの研究所でもひどいものは見てきたけど、これは、これはあれとはチガウ。チガウ。次元がチガウ。でも、ここで立ち止まるわけにはいかないんだ。

もしかしたら奥に生存者がいるかもしれないんだから。

奥に進んで見つけたのは切り刻まれた人間だけだった。あとは、中央管理室だ。ココだけは見ていない。その中央管理室にいたのが彼だった。

私と同じくらいの年で黒い髪と黒目。日本人の顔立ちをしている。だが特筆すべきはその目だった。あまりに暗く、冷たく、生きた人間の目じゃなかった。即座にバルディッシュをかまえる。

「誰だ」

「！じ、時空管理局執務官のフェイト・T・ハラオウンです。ここで何をしてたんですか。」

「・・・・フェイト、ね。」

「何をしてたんですかっ！」

「なぜ貴様に話す必要がある。」

「答えてください！」

「人殺ししてたよ。お前がほしい答えだろ。そうさ、人殺ししてたよ。」

「！！な、なんで、なんであんなこと、したんですか」

「意味なんてないさ。殺しに意味を求めるのは馬鹿がやることだ」

「あ、あなたは何も感じなんですか?!人を殺して何も思わないんですかっ」

「そう言っているだろ」

「命は一個にしかないんだ、懸命に輝いているものなんだよ。一番大事なものなんだよ。それにあなたが殺した人たちにも家族がいるんだっ。誰かが死んだら誰かが泣くんだよ」

「だから?」

「へ?」

「だからどうした。くだらない。何で俺がいちいち他人を気にしなくてはならない。どうだっていいんだよ。誰かが泣こうとか死のうとか、そんなのはオレの知ったことではない」

「あ、あなたを研究員の殺害の容疑で逮捕します。」

「本当にできると思っているのか?たかが執務官一人が俺を捕まえられると思っているのか?」

「私はあなたを許さない。私は、違法研究の取り締まりに来たんです。なのにっ、なのにあなたがっ」

「オレが研究員(ゴミ)を殺した。あんたは違法研究を止めたかった。結果としてあんたが止めたかった違法研究も止まったんだ。よかったじゃないか」

「でも、それでも、人を殺していい理由にはなりません。」
「じゃあこいつらを生かしておく理由なんてあるのか？」
「この人たちは法の下裁かれなければ、ちゃんと罪を償わなければいけないんです！」
「罪をつぐなう、か。無理だな。こんなことをするんだ。倫理なんてそんなものすでに捨てているだろうさ。」
「！っと、とにかく、あなたを逮捕します。」
「まぁ、やれるんならやってみたらどうだ？」
《アサルトフォーム》
「いきます。」
「いちいち確認する必要があるのか？」
！！むっ・・・
「行くよバルディッシュ」
《ソニックムーブ》
最速で彼の後ろに回り込み、そこから攻撃を仕掛ける。
バルディッシュで一閃。

「はあああぁぁぁ」

キンッ

「なかなか早いな。」

彼はどこからか取りだした刀で私の攻撃を受け止めていた。

「なるほど、速度重視、一撃必殺か。だがそれだけでオレに勝てるかな？」

たったの一手でここまで見破られるなんて。

武装解除するのに効率のいいバインドもさっきからかけようとしているが、彼のまわりで消えてしまう。

さっきの攻撃だって私の最速だったのに完全に目で追っていた。

つまるところほとんど手が残されてないんだ。

フルドライブぐらいしか。

「まだ、なんか隠してるなあんた。だが、そんなの出させるほど馬鹿じゃないんだよ。」

彼が消えた。完璧に消えた。目では追い切れなかった。

「ガハッ」

気がついたときには後ろからの攻撃。デバイスだと思っていた刀

は本物の刀だったらしい。

だって背中が斬られた。流れ出した血が下でたまっている。

「おいおい、あんたがさっきやったことだ。よけろよ。」

彼がそんなこと言ってたがもう聞こえない

斬られたことはない。母さんに鞭で打たれたことはある。

とにかく、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

「弱いな。だがあんたには死んでもらっては困るんだ。・・・・・・

はぁ、最近血を人に飲ませ過ぎな気がするがな」

うつ伏せになってる私を起こして口に何か押しつけてきた。

「飲め。じゃなければ死ぬぞ。どうやらあんた一人のようだしな。

弱いのに一人で突入するとは、したあんたが自意識過剰なのか、させた管理局がアホのか」

死ぬなんて言われたからって、飲んだら助かるわけじゃない。

「ふむ、どうやら死にたいようだ。困ったな。・・・・・飲まなければ、オレが口移しで飲ませるぞ」

飲む。絶対に飲む。

「・・・とでも言えば飲むかもしれ、飲むんだな。まぁいい魔力流すぞ。」

いきなり魔力を流しこまれた。

正直、これはいけないと思う。すごく快感だった。

まだそういうことしたことないけど、多分それに似た快感なんだろう。

ただ、相手は犯罪者だ。それを表に出さないように我慢する。

「ふむ、どうだ」

「どうだ、って何がですか。何を飲ませたんですか。なんで魔力流したんですか。」

「血を飲ませた。魔力流せば治るからだ。・・まぁどうやら大丈夫なようだな。」

「え？・・・・・嘘」

背中の傷が完全に治っていた。痛みが引いていて、傷もふさがっているのが分かる。

「じゃ傷も治ったことだし、オレは逃げるかね。」

「ま、待てっ」

「一応助けたんだから見逃せよ。」

「そ、それはそれ、これはこれだもん」

「ではあんたにオレを捕まえられるのか？」

「うっ」

そうだ、ほとんど全力の状態での攻撃を防いでいるんだ。フルドライブを使う意味もない。だって彼は私より速く動けるんだもん。

「そ、そんなもので、執務官が犯罪者を見逃す訳ないよ。そ、それに、あなたは、ここの研究員を殺したんだから。」

「そうか」

「・・・あんたはさ、なんで執務官になったんだ？」

いきなり、なんで？

「へ？そ、それは、執務官になれば私みたいに違法実験されて捨てられそうな人たちを助けることができるから。」

「あぁ、そういえばあんたはプロジェクトFの成功体だったな。確

かプレシア・テスタロッサの娘、アリシア・テスタロッサのクローン。」

「!?よく、知っているね」

「そうだな、あんたが地球で起こした事件や関連した事件も一応知っているさ。不思議だな。あんたもやったことは犯罪者と変わらないのに、力があるだけで今は執務官。ほんと魔法至上主義万歳だな。」

「あ、あれは」

「あんたの地球で起こした事件はこっちではもみ消されたようだな。都合の悪いものは消す。徹底しているな。まぁやったのは管理局側。あんたはそれも知らずこっちで幸せに生きてます、か。まぁでもあんたも自分の不幸に気付いてないらしい。それより考えたことはあるか?あんたがやったことで地球の人間に害を与えていたのかもしれないとか。ほんと、やるだけやって、後はどうだっていい。あんたら魔導士は自分勝手だな。」

「!?っ・・・・・・・・・・」

「どんなにきれいにもみ消したって他人に傷をつけたという事実は消えない。まさか、あんたはすべてが許されたと思っているのか?他人に許されたらすべてが終わると思うのか?何一つ終わらないさ。あんたがあんたである限り罪は消えないさ。今だってそうさ、あんたは俺と同じ犯罪者さ。」

・・・・・そうだ、いつからか私は忘れていたんだ。自分他人を傷つけても母さんに笑っていて欲しかった。ただがむしゃらに進んだ

結果が犯罪者。人を傷つけちゃいけないなんて言えないんだ。だって私はそれすら自分の糧として今ここにいるんだから。

「しかし不思議だな。あんたが管理局に協力するなんて」

「へ？・・・ど・・どういうこと？」

「なんだ知らないのか？あんたが生まれる原因にもなった事故。あれの失敗原因は管理局にある。プレシアもあそこに属していたしな。あの事故は管理局側が安全基準を無視した実験の結果さ。その事故でプレシアは実子アリシアを亡くした。自分の手がけた仕事で、だ。」

「管理局が、アリシアをころした」

「そうだな、まぁ自分で愛娘を殺したようなもんだ。普通なら発狂するさ。だがな、プレシア、あの女は違った。もともとあの女は科学者。大魔導士はおまけみたいなものだ。

科学者なんて言ってみれば背徳者のようなものだ。いままでなかったような手法を導いたり、禁忌に触れたことを行ったりとな。普通は自分の娘を蘇らせようとするだろう、普通に狂っていたのなら。狂い方が尋常じゃなかった。自分の娘を犠牲にしたんだ、自分の技術をよりよいものにしよう、とでも思ったんだろう。守るべきものを失い、そして残されたものが自分の娘を殺した知識と技術。ただ狂気とともに突き進むしかなかったんだろう。当時から関わっていたF計画で貪欲に知識を吸収しスカリエッティが組んだ基礎理論を発展させ完成させた。そこで気づいたんだろう、これならアリシアを取り戻せるんじゃないかってね。」

・・・・・・・まさかスカリエッティの名前をこんなところで聞くなんて。

「・・・・・・・・・・そして、私が創られた」

「いや、そこをお前は勘違いしている。」

「？」

「プレシアは、それを一度考え、そしてやめた。言ってみればやつの技術は娘の犠牲のうえに立っている技術だ。自分の技術の根底を否定するのは科学者としては出来なかったんだろう」

「？え、じゃ、どうして私は」

どうして作られたの？

「だがそれでも、もしかしたらと考えたんだろう。やつは実験の名目で記憶転写したアリシアのクローンを作ろうとした。しかしそれだけでなく、アリシアになかったリンカーコアを持つように手を加えた。その結果あんたが生まれた。あの女は自分に逃げ道を作っておいたのさ。自分が失敗してもいいような逃げ道を。アリシアの件以来あの女は失敗をしていない。あんたはアリシアじゃなかった。だがあの女もそれくらいは予想していただろう。けど、もしかしたらなんて思ってしまったら結果見るまで止まれないさ」

「・・・・・な、なんで予想できたの」

「クローン体に記憶転写をして本当によみがえるなら、逆に記憶喪

失になったやつは別人になるということだ。だが、たとえ記憶がなくてもそいつはそいつだ。」

・・・・・そっか。私はアリシアになれないのは予想済みか

「それからあの事件が起こった。プレシアにとっては都合がよかったのさ。自分を消し去るにはね。あの女はあんたをそれほど嫌っていなかった。もちろん好いていなかったが。まぁ知っての通りあんたをあの女は道具のように扱った。」

違う、母さんは私が嫌いだった。

「アリシアとプレシアは約束をしたそうだ。妹を作るってな。偶発的にだが妹ができた。だがそれを知らせる相手がいないんだ。むなしいだけだろう。まぁとにかくあんたを娘としては見れなかった。限界が来ていたんだろう。体は病でボロボロ、精神も狂気にさらされてとても平常とは言いにくい。だからあの人は最後の賭けに出た。アリシアとアルハザードに、ってね。どちらにしろすべてが終わるだろう。あれほどの頭脳を持った女だ、何の根拠もなくアルハザードがあるなんて言わないだろう。それに失敗を恐れているんだから。まぁその結果はあんたの知っての通りだが。」

「なんで、そんなに詳しいの？」

「俺はいろいろな研究施設のデータを求めている。当然時の庭にも行った。そしてあそこであるデータを見つけた。と、言ってもすべてのデータが消されていたからサルベージしたんだが」

「そのデータはなんだったの？」

「プレシアの日記さ、多分管理局も持っているだろうさ。なんせデータの消され方がひどいものだった。それにプレシアの研究データがほかの研究所で使われていた。」

・・・・じゃぁ義母さんやクロノが

「！！管理局がデータを流しているの？」

「今さらだな。管理局ほど違法研究を支援しているだろう組織なんてないだろう。だいたい、この施設だって管理局の末端だぞ」

「うそ」

「都合が悪くなったら執務官を向かわせて制圧して研究データを持ち帰り他の研究所で使う。皮肉だなあんたは研究所を取り締まっているつもりだろうが、研究をより拡大させているにすぎない」

「うそだ、うそだ・・・・・ぅ・・ぁぁぁああ」

いままで助けてきた人たちは私が研究を広げたから実験されていたの？もしそうなら、そうなら、私は結局人を傷つけていただけじゃないか

「ああぁぁああああああぁああああああああああああああああああ」

自分のすべてが否定されて、ただ、どうしようもなく、泣き叫ぶしかなかった。

そして私は――――

第7話　止まった私（後書き）

お久しぶりです。

こんな感じでどうでしょうか。

プレシアを極端にいい人や悪い人じゃなくて、微妙な立ち位置にしてみました。

フェイトの感情とか書きたかったけど少し難しいですね。

なんか会話メインで本当にみなさんが理解できるか不安ですが

ちなみに、いまだに出てこない魔王

感想、指摘、アドバイスがあったらよろしくお願いします。

第8話　始まる物語・・・物語って何だ？（前書き）

ｓｔｓ編にようやく突入です。

活動報告に書いたんですけど、新しいオリキャラの名前を募集してます。

自分の作品を読んだ方はわかると思うんですが、

プロローグと1話では、主人公の名前が決まらず名無しでやってました。

名前を考えるの苦手なんで。

年齢：２３
身長：１７６
体重：９０ｋｇ

外見：赤髪（と、いってもエリオのような色ではなく、もっとオレンジっぽい現実的な色？みたいな色です。）、目は灰色。
性格：普段はノリが軽いが、興味のないことには創路の次にやる気がない。やりたい時にやる男。過去に管理局の武装隊に属していた。

戦闘スタイル：銃器

なんかいい感じの名前会ったら募集してます。

第8話　始まる物語・・・物語って何だ？

時間は一気に加速する。

小さいころからわたしは、痛いことやつらいことから逃げることしかできなくて、ただ泣くしかできなかったんだ。

あのときだってそうだった。空港での火災。私は泣いて助けを待つしかしなかったんだ。

００７１年４月２９日

――――ミッドチルダ臨界第８空港――――――

１１歳の時だった。火災が起こったとき私は、お姉ちゃんと空港の中にいたんだ。大規模な火災に巻き込まれて、お姉ちゃんとも離れ離れになって、一人でさまよっていたんだ。

爆風に飛ばされて、倒れて、もう何もかも嫌で家に帰りたくて、泣いていた。

そんな時だった、後ろから倒れてきた銅像が視界に入ってきたのは。

明らかに私の方向に倒れてきていて、私は怖くて、ただ震えていたんだ。

そんな私を助けてくれたのは、大きな翼だった。

その翼に触れた銅像は溶けていった。
守ってくれたのはきれいなオレンジ色をした大きな鳥だった。一瞬自分は死んでしまっていてこれは夢なんかじゃないかと思えるほどその鳥は現実離れしていた。
そんなことを思いながらぼーっとしていた私を見たその鳥はいきなりしゃべりだした。
「ちっ、おい！アギト、さっさと出ろ」
「え～いいじゃんかよ～兄貴」
今度は見えないところから声が聞こえてきた。
でも私はそんなことに気づけるほど余裕がなかった。
だって、
「と、鳥が喋ったぁ。」
そう、鳥が喋ったんだよ。
「おい、誰がトリだ。」
「兄貴だよ。まんまじゃん。このまんま焼かれて焼き鳥になっちゃえってんだ」
そんなやり取りが目の前で行われている。はっきり言って頭おかし

いのかなと思った。このころ私はユニゾンデバイスなんて知らなかったし、ただでさえ相手がトリだったし。

「だいたい、なんで俺がこんな面倒なことをしなければならんのだ。機械どもに回収させればいいだろ。まったく。」

「そんなこと言いながら頼まれたことはきちんとやるんだもんな、兄貴は」

「もういい、さっさと帰るぞ。このガキも助かったんだ。あとはヤツらが勝手にやるだろうよ」

「うい～。」

そんなこと言いながら、飛び立とうとしている。ところでこんな大きな鳥どこから入ってきたんだろう？入れる場所にもないのに、そんなこと考えると、後ろに大きな穴があった。

あ～ぁ、あそこからはいってきたんだ、

なんてこのころは納得しちゃったんだけど、

今考えるとちょっとおかしいよね。なんで下から、みたいに思うしね。

まぁ、とにかくあの頃は納得して次にこんなこと言ったんだ、

「ねぇ、乗せてよ」

「は？」

弱虫だった自分が言ったと思えない言葉だったね。ほんと。

でも、それほど魅力的だったんだ。

魔法の力じゃなくて純粋な力のみで飛ぶ。魔法で飛ぶのとはちがうと思ったんだ。

それに私はとべないから。

こんなに重いからだじゃ、いつまでも飛べないから。

「乗せてよ。私空を飛んでみたい。」

「・・・めんどくさい」

そんなことを言って飛び立とうとするが、そうは問屋がおろしません。

今じゃみんなから言われる。異常に頑固だって。そんな私がこんなチャンスを見逃すわけなかったんだよね。

私は走って背中に飛び乗ろうとしたんだ。

それに気付いたトリさんはあわててていたけど。

『おい、アギト早く出ろ！！』

『！わ、わかった』

なんか飛び出てきたけど、そんなの気にならなくて私は飛び乗るの

に夢中だった。

飛び乗ったころには羽根がオレンジじゃなくて、黒になっていたけど、それ以外は何にも変化がなかった。それに羽毛もやわらかったんだよね～。

「ねぇ、飛ぼうよ、早く、早く」

さっきまで泣いていたんだけど、そんなことを微塵に感じさせないほど私は元気だった。

そんな私を見てあきらめたのか、

「はぁ、振り落とされるなよ」

「うん！！」

トリさんは、口からビームみたいのを出して天井に穴を作ってそこから出たんだ。あれは魔法の収束砲撃だったんだね。それにしてもすごい攻撃だったけど。

そこから飛び出たらもう夜だったんだなんてやっと思い出して、今まで周りが炎だったからすっかり忘れていたけど。

私を迎えてくれたのは満点の星空だった。

そんなの見ていると、さっきまでうじうじしていたのがちょっと馬鹿らしかったから、今を精いっぱい楽しもうと思ったんだ。

「ねぇ、もっと早く飛べないの？」

「注文が多いガキだな」

そんなこと言いながら空を飛ぶ速度をあげてくれた。

「ヒャーーーーーーー、ヤッホーーーーーーーーーーーーーーーー」

もうあのときは楽しかった。

空を飛びまわってから、しばらくしてトリさんがその場にとどまるように飛び始めた。

「え？もっと飛ぼうよ」

「残念だが終わりだな。さっきから後ろから何か付いてきている。」

「ええっ？」

―ＮＡＮＯＨＡ　ＳＩＤＥ―

私がそれを視認したのは偶然だった。

中に子供がとじこまれたからって聞いたから空港に突入しようとしたんだけど、そしたらいきなり空港の天井が吹っ飛ばされて中からそれが出てきた。

周りはみんな消火に夢中だったからそれに気づかなかった。たぶん気づいても半数は中からそれが出てきたことに気付かなかっただろう。だってそれは夜に溶け込むように黒かったから。

もしかしたら何かこの火災と関わっているかもしれないとすぐに追いかけたんだけど、いきなり空港上を巡回し始めたんだ。巡回といっても同じところをぐるぐるするんじゃなくてかなり不規則だった。それにスピードがあちらのほうが早かったんだ、多分フェイトちゃんより早いんじゃないかな？

だからいきなりあれが止まった時はびっくりしたんだ。どうしたんだろうって。

でも次の行動に私はもっとびっくりする事になるんだ。

―ＮＡＮＯＨＡ　ＳＩＤＥ　ＥＮＤ―

［ちっ、魔導士か。管理局だな。めんどい］

「どうしたのトリさん」

いきなりだんまりしちゃって？

「おい、ガキ空を飛ぶのはしまいだ」

「えーーーー。やだーーーー」

「わかった、今からお前を向こうに飛ばす」

「え？」

いきなり飛ばすなんていわれて、混乱しない人なんていないよ。でもほんとに飛ばすなんてわらしは微塵も思ってなかったから、やられた時は・・・・？

「うわわ？」

なんか風みたいなのに体を持ち上げられトリさんの背中から離れちゃったんだよね。

「

「ねぇ、これどうなってんの？」

「今からお前をあの魔導士に飛ばす。大声で助けを求めるんだな。そのあいだにオレは逃げる。」

「は、はくじょーもの」

「何とでも言え」

「向こうの人が助けてくれなかったらどうするの！！」

「海に落ちるしかないだろう、オレのしったことじゃあない。」

「おにーーーー」

そんなこと言い合ってる間も私の体は中に浮いていて、そろそろ投げるんじゃないかって体制に入った。

「投げるぞ」

そして投げ飛ばされました。

「うぞーーーーーーーーーーーーーー」

「だずげでーーーーーーーーーーー」

そんなこと大声で叫びながら真っ白な人に突っ込んだんだ。

でもぶつかったとき衝撃なんてなかったんだ。受け止めた人も「うそ・・・」なんて言ってたから結局あのトリなんだよね。何かをしたのは。ちょっとムカッてしたんだ。

振り返ってみた時はもういなかったけど。

そんなこんなでわたしの１１歳のときの不思議な体験は終わったん

だ。

これティアにいったら「ついに頭も湧いたか」なんて言ってきて、もう信じられないよね。こっちは本気で言ったのに。

でもこの体験で私は変わったと思う。前ほど泣かなくなったと思う。そしていまでも試しているんだけど、空戦の適正は無いから、それ以外で飛ぶ方法を。

最後の時私は空を、あのトリの手助けもあったけど、一人で飛んでいたんだ。あの時はほとんどそれを楽しむ余裕もなかったからもう一回飛ぼうと思って。

ウィングロードを使うのもいいんだけど、あれは飛ぶというより走るだからな〜。

こんなこと模索していることを知ったティアが、「暇人よね。あんたって」なんて言ってきて。ひどいよね。こっちは一生懸命取り組んでいるのに。

あ、ちなみに今は陸士訓練校に入ったんだ。理由は、管理局とかに行けば、もっとたくさんの魔法をあるから私が飛べるために使える魔法があるかも、なんて思ったから。

それをお姉ちゃんに言ったらすんごく怒ってたんだよね。そんな理由で管理局に入るな、なんて。まぁお遊び気分かもしれないけど、いいじゃん。もう一回飛んでみたいんだから。

お父さんは笑っていたけど。「お前は自由だな。」なんて言って。

まぁそんなこんなで今は陸士訓練校。

これからがんばるぞ～

？

第８話　始まる物語・・・物語って何だ？（後書き）

やっとでたなのはさん。原作の主人公なのに印象薄

今回はスバル編でした。

なんか空を飛ぶことに夢中で、あまり人助けしたいなんて思ってないように見えますが

チャンと思っていますよ、４０％ぐらい。まぁ残りは空を飛びたいって欲求でしょうけど。

まぁ、自分の目の前で人が傷ついたら助けようって程度です。

自分を助けてくれたトリがそんな感じだったのを感じ取ったんでしょうね。

わかっていると思いますがこのトリは創路です。初めてちゃんとした感じで獣形態をかけたかな。

アギトとのユニゾンを試したって感じですね。結果は触れたものを溶かすほどの熱気を体から放射するって感じですね。

次回はティアナにしようか、なのはにしようか迷ってます

第9話　はじまっていた物語・・・・だから物語って（前書き）

は、話しがすすまない。ｏｒｚ

今回は少し短いです。すいません

夏休みに入ったらもう少し書けると思ったんですけどうまくいきませんね。

第9話　はじまっていた物語・・・・だから物語って

誰だろうか？

オレにオレが化物って教えてくれたのは？

思い出せないな

いや、でもそれがオレならオレは何だって受け入れるさ

――――――――『故にオレはバケモノ』第9話――――――――

一とあるホテルの一室

「・・・おはようございます。早速現場をよんでみましょう。はい、

こちら現場です。火災は現在は鎮火していますが、煙はいまだに立ち昇っている状態です。なお現在は時空管理局の局員によって危険の調査と事故原因の解明が進められています。幸いにも迅速に出動した本局魔導士の活動もあり民間人に死者は出ておりません。・・・」

ベッドに3人の金髪と茶髪とタヌキが寝ている。

「やっぱりなぁ～」

タヌキがつぶやく

「ん？なにが？」

それに反応する茶髪。

「実際働いたんは災害担当と初動の陸士部隊となのはちゃんとフェイトちゃんやんか」

タヌキがテレビを消しながら答える。

「まぁ、休暇中だったし」

茶髪が答える。

「民間の人たちが無事だったんだし」

金髪もどうでもよさげに答える。

「あんな、なのはちゃん、フェイトちゃん、私やっぱ自分の部隊持

ちたいんよ。今回みたいな災害救助はもちろん、犯罪対策や発見されたロストロギアの対策も、・・なんにつけミッドチルダ地上の管理局部隊は行動が遅すぎる。後手に回って承認ばかりの動きじゃあかんし、あたしも今でもフリーで呼ばれてあっちこっちまわってたんやちっとも前に進めてる感じがせえへん。少数精鋭のエキスパート部隊、それで戦果をあげてったら、上のほうも少しは変わるかもしれへん。でな、私がもしそんな部隊作ることになったらフェイトちゃん、なのはちゃん協力してくれるかな、・・・もちろん二人の都合とか進路とかあるんはわかるんやけど」

「はやてちゃん、何を水臭い小学三年生からの付き合いじゃない？」

茶髪が答える。

「それに、そんな楽しそうな部隊に誘ってくれなかったら逆に怒るよ。ね、フェイトちゃん？」

「・・・・・・・・・・」

金髪が答えない。

「フェイトちゃん？」

「・・・なのはもはやてもさ、傲慢だね」

起き上がりフェイトが答えたのは二人が予想もしなかった答えだった。

「フェ、フェイトちゃん？」

「・・・・はやての言っていることってさ要は地上部隊のことを無能と言っているのと同じなんだよね？」

「で、でもな、実際部隊が後手に回っているのは事実なんや。」

「それはさ、はやての主観でしょ。いままでの地上部隊の記録とか見ていってるの？」

「そ、それは」

フェイトは今猛烈に怒っていた。自分が属していた組織の闇、また知らず知らずに自分がそれに関わって一端を担っていたこと。なのはもはやてもそんなこと知らず、自分の理想を他人に押し付ける。『陸』の現状を知っているフェイトから見てみればはやての言い分は現場を知らない人間の言葉だ。

「確かに『陸』は『海』に比べて犯罪は少ないし、『海』のほうが犯罪の規模が大きい。でもね、『海』での仕事ぶりを知っているから『陸』が仕事をしていないといえる。そんなの傲慢だよ。部署によって働き方が違うのは当然だよ。『陸』には『陸』の解決方法があるんだよ？それをさ、対応が遅いの一言で片づけるのは侮辱だよ。それにいままでのデータを見ていたのならそんなこと言えないだろうしね。年々犯罪発生率は下がってきているしね。それにいままでの災害だってチャンと対処しているよ。それなのにまだ対応が遅いって言うの？」

「で、でも」

「はやてはさ、地上部隊の悪いところしか見てないよ。はやては地上部隊所属なんだから一番知ってなきゃいけないんじゃないの。」

はやてはそれ以降下を向いて何も言わなかった。

「フェ、フェイトちゃん言いすぎだよ。はやてちゃんだって別に悪気があったわけじゃないんだから、ね？」

なのははフェイトがあんなに友達の意見を否定したのを見たことがなかったから困惑していた。

フェイトの言ったことの真偽はともかく、これではあまりにはやてがかわいそうだった。

「なのはもさ、『楽しそうな部隊』ってなに？」

だが、フェイトの矛先は次にそのなのはに向かった。

「え？」

まさか自分に矛先が向くとは思わず絶句する

「すくなくとも今の話から部隊は人命救助も活動に入るのがわかるのに、それを楽しそうっていうのは不謹慎だよ。十分考えられることなのに。」

実際に思っても口に出すべきではないだろう。

例えば病院で医者、人の命を扱う彼らは決して医者は楽しいなどと言わない。言うとしても、仕事にやりがいがある、程度である。

「ち、ちがっ。わ、私は部隊でみんなでいるのが楽しそうだなって。なにも人命活動をたのしそうって言ったんじゃ」

今気がついた、そんな顔をしながらこっちを見る。

当たり前のことに気がつかない。いや、そうじゃないな。

当たり前じゃないのが当たり前なんだ。

それがどれだけひどいことなのか理解できてない。

「無意識の暴力、か」

「そういえばさ、はやてさっき上が変わるとか言ったけど、それは無いと思うよ。どう頑張ったって上の考えは変わらないよ。だって部隊のトップが犯罪者だもん。その部隊の戦果がきちんと評価されると思うの？」

「！！なっ」

あまりの言葉にはやては言葉が出ない。

「フェイトちゃんっ！！言いすぎだよ。それにはやてちゃんは犯罪者じゃないってことは一番私たちが知ってるはずだよ」

なのはもさすがに容認できないのか、フェイトを非難し始める。

「？なにをいってるのなのは。私もはやても地球で人を傷つけた。それは十分に犯罪だよ。仕方なかった、なんて言い訳は通らないんだよ。だって実際に傷ついた人がいるんだから。それに事実がどうあれ周りはそう思っているよ。私やはやてが部隊を作ったって高確率で正当な評価はされないよ。」

「でも、はやてちゃんはいま罪を償おうとしているじゃない。それにフェイトちゃんだって罪を償うために管理局にいるんでしょ」

その言葉にフェイトは首を振りながら答える。

「罪を償う。聞こえはいいけど自分のしたことを間違っていたって否定するってことでしょ？私はあれを間違えたと思わない。それに罪は償えばなくなるのかな。私は無くならないと思うよ。私が傷つけた人はずっとその傷を負って生きるんだから。」

フェイトは創路にあってから自分の罪についてもっと考えようと思い始めていた。自分が何をしたかなど、そんなのずいぶん前から理解している。

罪は罪だ。ずっと消えない。

だけど自分がやったことを否定などしない。

間違っていたとも思わない。

他人を傷つけても取り戻したいものがあった。

だれでもあるもの。それが自分にとってはひどく儚く手に入れにくいものだった。

結局手に入れられなかったけどその過程を無駄とも思わないし、自分に言い訳もしない。

あそこでもし、なんてｉｆはいらない。

今必要なのはこのどうしようもない現実に向き合うだけの心。

「あの事件にまた戻っても何回も同じことを繰り返す。何回だってなのはと対峙するよ。私はあの結果に後悔はしてないよ。私はね、なのは、自分と似た出自の人を助けたいと思って執務官になったんだ。だけど助けると同時に人を傷つけてきた。」

なのはたちは友人が自分の思惑とは外れた理由で管理局に入ったことにひどく驚いていた。

だが彼女たちは次の言葉により衝撃を受ける。

「私ね、もう管理局やめようかなと思ってるんだ」

「「！！」」

フェイトは真実を創路に告げられたそのあとに本局で自分の担当した事件のデータを洗い直し、自分が持ち帰ったデータの行方を捜査した。結果、創路の言ったことが事実だということがわかった。

どうしようもなく絶望したフェイトは管理局をやめることを決めた。

だが、管理局が違法研究を支援している。この事実をそのままにしておくわけにはいかなかった。

そんな時に創路の事を思い出したのだ。

彼は違法研究所を潰しまわっている。それはフェイトのように実験体の救助という目的ではないが、だが少なくとも研究は止まり始

めている。

そのことを考慮して彼女は創路にまた会おうと考えていた。今までのように人殺しをすべて否定できない。創路がやることすべてを容認は出来ない。

でも彼のそばなら今まで見えなかったものが見えるかもしれない。

少なくとも創路に会う必要がある。それまでは管理局にいる必要がある。腐っても組織だ。創路が外からなら自分は内から闇を見ていよう。

「私は管理局に夢を見過ぎていたみたい。この世に何一つ正しいことは無くて、それでも何かにすがらないと人は生きていけない。そんな世界に少し疲れたんだ。」

そういったフェイトを見てなのはとはやては一瞬フェイトのほうが自分より年上なんじゃないかと思ってしまった。それほどフェイトは大人の魅力があったのだ。

結局そのまま、3人は別れてしまった。この後3人が揃うのは4年後。

――そして物語は始まる。

第9話　はじまっていた物語・・・・だから物語って（後書き）

すいません、こんなんで。

オリキャラの名前のアンケートですがやはり自分で考えなきゃいけませんね。すいません。少し皆さんに甘えてました。

今回は前回指摘にあったセリフの多さをどうにかできないかと頑張ってみたものの結果は・・・トホホ

まぁ、今回は3人娘のホテルでの会話を描いてみました。

よくよく考えてみたらリィンもいたんですけどいいかなって。どうせ喋らないでしょ、みたいな。

フェイトはどうなるんでしょうね。自分でもわからないです。（笑）

でも、なんだろ、創路に全面協力するわけではなくて事件を解決のため自分なりに考えたあとに選択する的な。まぁよくわかりませんがそんな感じでいくかな～程度ですね。

そういえば１２万ＰＶ行きました。

ありがとうございます。

本当こんな駄作を読んでいただいて。

本当なら他の作者がやっているような事をすべきなんでしょうが自分の力量をよく考えてからにします。

これからもより一層と言いたいんですが、まぁボチボチやっていくんでよろしくお願いします。

第１０話　オレは初めてじゃない！！（前書き）

久しぶりです。

本当に久しぶりです。

ひさしぶりに書きました、

大学が始まるよ。いやだ～。

第１０話　オレは初めてじゃない！！

００７５年　４月
臨海第８空港近隣　廃墟都市街

ここである試験が行われようとしている。

二人の少女がそこで準備運動や武器の整備をしている。

――――――――『故にオレはバケモノ』第１０話――――――――

「スバル？あんまり暴れていると試験中にそのおんぼろローラーが逝っちゃうわよ」

あまりに急ペースな準備運動にオレンジ色の髪をした少女、ティアナ・ランスターが自分の銃型デバイスをいじりながら青髪の少女を注意する。

「そうなんだよね～。でもぉティア試験前に怖いこと言わないでよ。ちゃんと油も差してきた。」

それに青髪の少女が答える。そうは言いながらも最近自分のデバイスの調子が悪いのは事実なので、試験中に壊れないかひやひやしている。

時間が来たのか連絡モニターが展開される。

「おはようございます。さて魔導士試験の受験者さん2名そろってますかぁ？」

「「はい！」」

-数見ればわかるのにね、ティア-

-仕方ないでしょスバル。一応そういうのがマニュアルなんでしょ-

「確認しますね。時空管理局陸士３８６部隊所属のスバル・ナカジマ二等陸士」

「はい！」

「と、ティアナ・ランスター二等陸士」

「はい！」

「所有している魔導士ランクは陸戦Ｃランク。本日受験するのは陸戦Ｂランクへの昇格試験で間違いないですね？」

「はい！」

「間違いありません！」

「はぁい、本日の試験管を務めますのは、わたくしリィンフォース・ツヴァイ空曹長です。よろしくですよぉ。」

-ププ、ですよぉ、だってティア-

-笑っちゃだめよスバル。本人はいたって真面目なんだから-

「「よろしくお願いします！！」」

念話をしながらも受け答えしているところをみると二人とも結構余裕があるみたいだ。

上空を飛ぶヘリコプター

そのヘリコプターから下をのぞくように身を乗り出している人間がいる。

時空管理局二等陸佐　八神はやてである。

「おっ、さっそく始まってるなぁ、リィンもちゃんと試験官している。」

「八神二佐、わざわざモニターがあるのにドア全開にする必要はないので閉めていただけると嬉しいです。」

そのヘリコプターの中でメガネをかけモニターをみながら注意している金髪の女性が時空管理局執務官のフェイト・T・ハラオウン。

「フェイトちゃん、べつにええやん。てかその八神二佐ていうのや

めてくれへん」

「公務中ですので。もともと私はほかの任務があったのにどこかの誰かにむりやりこんなところにつれて来られたんです。あまり機嫌が良くないと思ってください。」

「はいはい、私がわるうございました～」

そう言いながらドアを閉める。

「この二人が八神二佐が見つけた子たちですか」

「うん、二人ともなかなかののびしろがありそうなええ素材や」

「今日の試験の様子を見て行けそうなら正式に引き抜(ぬ)くわけですか。」

「直接の判断はなのはちゃんにお任せしてるけどな。部隊に入ったらなのはちゃんの直接の部下で教え子になるわけやからな」

「そうですか、あまりわたしには関係のないことですね。」

「そんなこと言わんと部隊に入ってくれへん？」

「・・・・・・・・」

フェイトは数日前のことを思い出していた。

実はフェイトはすでに創路とコンタクトをとることができていた。
きっかけは4年前のあの日のすぐ後の任務で違法研究を部隊で取り締まりに行った時だった。
その時もすでに創路が研究所を破壊していた。だが創路自身はまだデータを集めていた途中だったのかまだ研究所にいたのだ。しかも都合よくフェイトの探査範囲に。
その時に自分のアドレスを渡し逃がしたのだ。
その創路から数日前に連絡が入ったのだった。指定の場所に行くとそこには創路と赤い髪の男の子がいた。
「来たか。」
「うん、それより創路頼みってなに？」
「俺が今、スカリエッティのところにいるのは知っているだろ」
「・・・・・・うん」
やはりまだスカリエッティに関しては複雑なのだろう。
「あいつが立てている計画で今度設立される部隊に間者を送ることになってな。」
「間者？」
「・・・はぁ、スパイのことだ。さすがの中卒だな。自分の住んで

いた世界の言葉だ。もう少し大切にしたらどうだ。」

「グサッ・・・・うん。」

「それでだ、スパイを送ることになったんだが当初は機人のなかから選ばれて送られるはずだったんだが・・・・はぁ、やつらは駄目だな。性格面にしろ、やつらの技術面にしろな。そこでなぜか知らないけどうちのエリオ坊ちゃんが行くことになったんだ。ほんと、なんでだろうな。ほら、エリオ挨拶ぐらいしろ。おれがよく言っている半露出狂の女だ。」

「！！」

「あ、柊エリオです。よろしくお願いします・・えっと、ハンロシュツキョウさん？」

「！？グハッ」

いつも創路にからかわれていので創路だけだったら冗談として受け取ることが出来たが、さすがに無垢な表情をした１０歳児に言われたのは堪えたようだ。胸を抱えながら落ちた。

「ちちちちち違うううって。露出狂じゃないよぉぉぉぉ」

「だったら、さっさとあんな変態ＢＪ変えろよ。」

「そんなこと言ったって自分の戦闘スタイルにあわせたらこうなったんだよ。どうしようもないじゃん。」

「まあ、いい」

「よくないよっ！」

「それでだ、エリオを送り込むにあたってだが」

「無視？！」

「自分で考えろ。それよりだ、エリオはまだ１０歳だ。それにいままで遊びという名の戦闘訓練しか行ってこなかったから、頭のほうはパーだ。」

「そ、そんなことないよ。」

「それでだ。お前にこいつのサポートを頼みたい。」

「ちょ、兄さん！！」

「えっと、私そこまで自由じゃないんだけど？だいたい私がその部隊に手を出せるかさえ・・「配属されるのは機動六課だ。」えっ？」

「だからお前に助けてもらいたい、別に計画を助けてもらいたいわけじゃない。ただこいつもそろそろ集団行動やらなんやらを教える必要がありそうだからな。今回はちょうどいいタイミングだしな。」

「えっと、私機動六課には属していないんだけど？」

「な・んだと・・・。まあそれは知っている。だから属してくれと言っているんだ。その間俺があんたの代わりに違法研究所を壊す。そのデータもお前の所に送る。・・・・・頼まれてくれないか」

フェイトは驚いていた。というのも初めて創路が自分に頼みごとをしてきたからである。だからなのか少しいたずら心がわいた。

「う～んとね、そうだな～。創路が私にキスしてくれたらいいよ。」

「・・・・・・・・・・・」

創路もエリオもぽカーンと口をあけて驚いているのか呆れているのか、どちらにしろ予想していた反応をしなかったのでフェイトはあわてた。

「な、なんてね冗談だ「・・・わかった」よ？・・・えっ？っ！！んんんっ！！！んんんんっ！！！！」

言葉にならない声があがる。

エリオは手で顔を隠しながらも指の間からそれを見ていた。かおを赤くして。

「ぷはぁ・・・・」

「エリオのことは頼んだぞ」

「・・・あ、うん」

「悪いがいろいろあるんでな、失礼させてもらう。」

「その、ありがとうございます。」

「・・・・・・・・・うん、じゃあね」

二人が転移魔法で転移していく。

「・・・・・ファーストキスだったんだけどな。ま、創路ならいっか」

自分の唇に指をあてそんなことをつぶやいた。冗談で言ったのは自分だ。

しかしいきなりディープは駄目じゃないかな。

そんな事を思いながら立ちあがって帰って行った。

「・・・・・・・わかりました。一年だけならいいでしょう。こちらにも都合いいですし」

「ほんまか、ありがとな」

そういいながらはやてはフェイトに抱きつこうとするがフェイトがよけてしまったのでヘリの反対側のドアに激突した。

「・・・そこは抱きつかれるところやろ」

「そろそろ始まりますよ、試験」

「ちょ、無視!?」

さらにヘリの上空には別の人影もあった。

獣人体に変化した創路である。またアギトがユニゾンしているからか色が赤系統の色でまとまっている。

「試験が始まるぞ、兄貴」
「・・・ああ」
「しかし兄貴も過保護だよな、エリオの仲間になる奴らを見に来るなんて」
「関係ない。ただの偵察だ。」
「はいはい、そういうことにしときますかね。」
「結界を張るぞ」
「はいはい」

いきなり創路を中心に球体の結界が広がる。この結界、魔力や気配などを遮断するものである。

試験場からは少し離れた場所。

栗色の髪をした戦技教導官高町なのは一等空尉がモニターをチェックしていた。

『ｔｈｅｒｅ ｉｓ ｎｏ ｂｉｏｌｏｇｉｃａｌ ｒｅａｃｔｉｏｎ ｉｎ ｔｈｅ ｒａｎｇｅ，ｔｈｅｒｅ ｉｓ ｎｏ ｄａｎｇｅｒｏｕｓ ｏｂｊｅｃｔ ｅｉｔｈｅｒ．Ｃｈｅｃｋ ｏｎ ｔｈｅ ｃｏｕｒｓｅ ｗａｓ ｆｉｎｉｓｈｅｄ．』

「うん、ありがとうレイジングハート。観察用のサーチャーと障害用のオートスフィアも設置完了。私たちはここから見ていようか。」

『Ｙｅｓ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ．』

再び戻って、試験場

「二人はここからスタートして各所に設置されたポイントターゲットを破壊、あっ、もちろん破壊しちゃだめなダミーターゲットもありますからね。妨害攻撃にきをつけてすべてのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです。何か質問は？」

「えっと・・・」

-ずるは何回までですか、とか聞いたら素直に答えそうだよねこの試験官-

-そんな馬鹿な質問するかわいそうな頭を持った連中は今までいなかったでしょうからね。-

「ありません」

「んじゃ、ありません」

「では、スタートまであと少し。ゴール地点で会いましょう、ですよ」

今までリィンが映っていたモニターが消え別のモニターが出る。

カウントダウンが始まる。

―3

「・・・・プ、ックアハハハ会いましょう、ですよ、だってティア。
」
「スバルッ！もうカウント始まってるのよ」
－2
「アハハハ、は、・・もうわかったよ。ティアはせっかちだなぁ」
「そういう問題じゃないでしょ！」
－1
「そう？」
「そうよ。！！」
-0
「ああっ、もうスタートしちゃったじゃないの、行くわよスバル」
「は～い」
なんともしまらないスタートであった。

第１０話　オレは初めてじゃない！！（後書き）

こんな感じで始めます。うん。キャラが違うとかなしね。

フェイトは公私を分けます。的な。あとメガネをかけているのはあんな暗いところでモニター見ていたら眼悪くなるよ。と思ったんで、うちの母親がそんな暗いところでゲームをするならメガネぐらいしなさい。と言われたのを思い出して、掛けさせました。まぁだからと言ってどうというわけではないんですけど。

スバルは馬鹿です。しかもあのノリ。

ティアナ。苦労してます。色々と。主に青髪のせいで。

次は試験を書くつもりです。短くなりそ。

ちなみにアンケートはもう少ししたら締め切ろうかと思っております。

質問、誤字脱字、他の指摘、感想、そのほかお待ちしております。

第１１話　私って天才！！ｂｙスバル（前書き）

一日に二話更新とか初めてです。

ちなみにその間に劇場版００見てきました。あれはぶっちゃけファフナーだった。でも散り際が何か印象に残るキャラばかりだった。

第１１話　私って天才！！ｂｙスバル

ぜんかいのあらすじ。
ふぇいときすをする。

「おおっ、はじまった始まった」
「・・・まぁ、実力があればいいですね。」
「フェ、フェイトちゃんが冷たい。」
「動きだしましたね。」
「また無視？？」

若干遅れてスタートしたティアとスバル。
まずティアのアンカーガンで向こう側のビルに打ちこむ。

「スバル！」
「うん。」

スバルを抱えアンカーを巻き戻す。
だが、

「お、重い。」
「ちょ、ティア。それは女性には禁句だよ。」
「もう無理。あんた中のターゲット破壊してきなさい。手早く、ね」
そういいながら半分放り投げるようにスバルを向かいの窓から侵入させる。

「聞いてないよ、そんな話ィィ」

そんなこといいながらちゃんと侵入して着地してるあたり優秀なようだ。
すぐにオートスフィアが攻撃してくる。
「もう、邪魔しないでよ。ティアに文句言わなきゃいけないんだからぁぁ」
自慢のローラーで攻撃をかわし、まず一機を殴り壊し、そのまま勢いを殺さず回し蹴りで二機目を壊す。
ただ進んでいた方向が行き止まりとわかったので
「ロードカートリッジ、リボルバー、シュゥゥート」
突風を巻き起こし最後のオートスフィアを破壊した。
なんだかんだいって実力はあるのである。
「やっぱりめんどくさい。」
ただし実力にやる気が伴っていない。

一方そのころティアナと言えば。
(落ち着いて、冷静に)
足元に丸い魔方陣が浮かぶ。
そして次々とすぐ下の階にあるターゲットを壊していく。
すべて破壊したのを確認して、そのビルを飛び降りる。

そして下でスバルとティアが合流する。
「ティア、さっきはよくもぉぉぉ」
「タイムは順調ね。ま、当然ね」
「無視するなぁぁぁ」

ヘリコプター内

「まぁ、性格面はともかく実力はいいコンビですね」
「そやけど、難関はまだまだ続くよ。特にこれが出てくると受験者の半分以上は脱落する最終関門大型オートスフィア。」
「今のところの二人のスキルだと防御も回避も難しいですね。中距離自動攻撃型の狙撃スフィア、でしたっけ。」
「そや、どうやって切りぬけるか、知恵と勇気の見せどころや」
「はぁ、そうですか」
いや勇気とか知恵とか実力の内だし。とか思っても言わないちょっと大人なフェイトであった。

道路を走っていくと、ターゲットやらオートスフィアが待ち構えていた。
「うげぇ、なんとも嫌な光景。」
「行くわよ、スバル。」

「ティアは元気だねぇ」
「うるさいっ！！さっさと行くわよ。」
「はぁ、は～い」

ティアは瓦礫などに隠れながら乱れ撃つ。その間スバルが走り回りながら撹乱しつつ着実にオートスフィアを壊してゆく。

「はぁっ！」

そしていま見渡す限りの敵を破壊した。

「よし、全部クリア」
「この先は？」
「このまま上。あがったら最初に集中砲火が来るわ。オプティックハイドをつかってクロスシフトでスフィアを瞬殺、やるわよ。」
「え～ぇ、もっと楽に行こうよ。」
「うるさい、じゃあ他に策はあるの？」
「う～ん、策じゃないけどティアが撃ち落とせばいいじゃん。」
「は？」

ティアたちの上のフロアでは、オートスフィアが散開しており、普通に登ってきたら集中砲火の餌食だ。
だが突如としてスフィアが破壊される。それもいろんな角度から飛んでくる砲撃によって。

ヘリコプター内
「あっ」
はやてが驚くのに対してフェイトは

「へぇ、どっちだろ？やっぱりオレンジの娘かな？」
感心していた。
・・・・・実力差がうかがえる。

数分前
「は？あんた何言ってんのよ？」
「だーかーら、ティアが撃ち落とせばいいんだって。うんうん。私天才。」
「どうやって撃ち落とすのよ。」
「へ？そんなのティアがいつもやってたアレだよアレ」
「アレって・・・・ぁあ、跳弾のこと？たしかにできないことないけど無理あるわよ。角度とか計算してたら時間食っちゃうわよ。」
「だーかーら、ティアは撃ち落とせばいいの。わたしが角度計算するから。」
「あんたが・・・ってそういうことね。いいわ、それなら私のアンカーガンも壊れることなさそうだしね。」

そしていま。

「12時の方向40度上、次2時の方向15度、11時の方向5度上」
「おっけ」
金色の目をしたスバルの的確な角度にデバイスを感覚で合わせるティア。多少外れても生成する魔法弾が十分な大きさのため、破壊を可能にしている。

「ここから見えるスフィアは一掃したね。まだ数体のこってるかもしれないけど。」
「しかし、あんたもたまには役立つのね」
「まあね、あんまり使いたくないけどね。この能力は。」
「・・・行くわよ、スバル。」
「うん。」

上のフロアに登ってターゲットを破壊し始めた二人だが。

「スバル、防御っ！！」
「ん？うわっ」
「ちっ・・・」

スバルの後ろの柱にスフィアが一体迎撃態勢で浮かんでいるのをティアが発見した。
スバルを強引に動かし自分も砲撃からさけながら砲撃しようとするが途中で足をつっかえて転んでしまう。すぐに砲撃を避けるため転がりながらいい具合に瓦礫の後ろに回り込みなんとかスフィアを破壊する。ただこの時乱れ撃ったため近くに設置してあったサーチャーを破壊してしまう。

「ん？なんや」
「サーチャーに流れ弾が当たったんですよ、多分。それらしく見えましたし、状況的にそれ以外ないと思いますけどね。」
しかしそうとは思わないものが一人
「トラブルかなぁ？リィン一応様子を見に行くね。」
「はいです。お願いします」

『Ａｍ　Ｉ　ｓｅｔ　ｕｐ？』
「そうだね。念のためお願い。」
『ａｌｒｉｇｈｔ，　ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｕｐ』
まぁ、仕事人なんですね。多分。

スバルが駆け付ける。
「ティア！！」
「騒がないで、何でもないから」
「嘘だ、グキッっていったよ、捻挫したでしょ」
「だからなんでもないって、イタッ」
捻挫している足で立てない。立つだけで激痛が走る。
「ティア、ごめん。油断してた」
「あたしの不注意よ。あんたに謝られるとかえってむかつくわ。走るのは無理そうね。最終関門は抜けられない。」
「ティア」
「あたしが離れた位置からサポートするわ。そしたらあんた一人ならゴールできる。」
「ティア」
「うっさい。次の受験の時はあたし一人で受けるって言ってんのよ。」
「ティア、それじゃダメでしょ。この受験はティアの目的のために必要でしょ。それを今投げ出す理由もないよ。」
「この足でどうしろって言うのよ、あんたは。」
「私前に言ったよね、空を飛びたくて管理局に入ったって。正直魔法ランクがＢにあがったらもう少しみられる資料があるかなぁ、ぐらいの認識なんだ。別に特段人助けしたいわけじゃないし、ね。シ

ユーティングアーツもあまり乗り気じゃなかった。だけどねティアは違うでしょ。はやくランクをあげて執務官になってやらなきゃいけないことがあるんでしょ。」
「知っているわよ。あんたは誘わないとずっと資料あさってるでしょうしね。だからどうしたのよ」
「ティアを合格させるためにティア、協力してよ」
「はぁ？」

すこししてティアナが走りながらでてくる

「お、でてきた」
「ん、少し・・・」

そのすぐ後に最終関門のスフィアがティアナを補足したのかビルから砲撃してくる。そして、ティアに直撃した。

「あっ、直撃？！」
「いや、これは・・」

煙が上がった場所から傷一つ負わずにティアナが変わらぬ速度で走ってくる。それも今度は撃ってくる砲撃を次々とよけながら。

「高速回避、いやちゃうな・・」
「はぁ、この娘、ティアナはおとりですよ、八神二佐」
「今なんか私みながらため息つかんかったか？」
「いえ、特には」
「なんや、特にはってぇぇぇぇ」

そして再び砲撃がティアナに当たる。そして後には何も残らなかった。
（場所は、白い６階のビル。５階よ、スバル。あんたしくじんじゃないわよ。その時は二人とも落第なんだから。）

少し離れた場所のビルの屋上ですばるが待機していた。
「おっけ、ウィングロード」
ウィングロードで空に道を作り、対象のビルの６階に突っ込ませる。
そしてそのまま全速力でウィングロードを駆け、壁をぶち破り中に入る。そしてそのまま、床を破壊し始める。
試験中に使われるスフィアはその性質上致命的な弱点がある。
それは、人を確認してから攻撃や防御をすること。そのため人を感知できないと攻撃できないのである。
そして偶然か否かスバルの攻撃はその条件を満たしていた。スフィアが落ちてくるスバルを確認するより早く崩れてきた大きな瓦礫がぶつかりスフィアは壊れてしまった。
「あれ、壊れちゃった？」
偶然だった。

「ま、いっか（ティア終わったよ。）」
（んじゃ、さっさと動く。時間ないんだからね。）

スバルがティアナを背負う形でローラで走る。
「あと何秒？」
「２０秒まだ間に合う。」
そして最後のターゲットをティアナが破壊する。
「はい、ターゲットオールクリアです。」
ゴール地点で確認していたリィンにも見えた。
「よしすこしスピードを上げるよ、ティア。」
そういいながらローラーの回転速度をかなりあげ、スピードを上げる。
「ちょ、ちょっと何が少しよ。とまれるんでしょうね。」
「うん、この間見つけた重力魔法でね。ただし使えるのは少しなんだけどね。それも減速度あげればいいし」
なんだかんだで一応考えている、スバルであった。

しかしそうは見えないので
「あ、なんかちょいヤバです。」
なんて発言があったり、

そうしているうちにゴールを通過。
すぐにスバルは強力な反重力場を生成。といってもわずかコンマ何秒であるが、それでもスバルたちには十分だった。

だがそれを予知していなかった人はアクティブガードとホールディングネットをセットしており、それらがセットされている場所の手前で受け止めるはずの二人が止まっている、というなんとも間抜けな状況が作られていた。

「ね、ティアこれってこれを使って遊んでくださいってことかな」
「んな訳ないでしょバカッ。どうせ止まれないとか思ったんでしょ。」

それが聞こえたのか胸を抑えているばってんチビと某悪魔がいたが。

「ふ、二人とも、みているこっちはハラハラでしたよぉ」
そんなところにリィンが表れ叱っているつもりなのか愚痴っているのかわからない口調で延々と続きそうな言葉の羅列を次々と口から吐き出すが、

「「ちいっさ」」

という二人のシンクロした口撃に口を止めてしまう。

「うっ、そ、そんなことは無いですよ。もう少し上官を敬うというかですねぇ・・・」

「まあまあ、ちょっとびっくりしたけど無事でよかった。とりあえ

ず試験は終了ね。お疲れ様。」

そういいながら上から飛行魔法を用いて降りてきてアクティブガードとホールディングネットが消す。

「リィンもちゃんと試験官できていたよ。」

「ほわーい、ありがとうございます。なのはさん」

ＢＪを解除するなのは。しかしその手前こう思った二人。

（（さすがにあんなコスプレ寸前のＢＪはないわ））

「まぁ、細かいことは後回しにして、ランスター二等陸士。治療するからブーツ脱いで」

「あ、はい。」

「あ、治療なら私がやるですよ」

「あ、えと。すいません。」

そのあとスバルのほうをなつかしむ目で見ていた。

「？えっと、なにか？高町教導官」

「４年ぶりかなぁ、背伸びたね、スバル。またあえてうれしいよ。」

「？？４年前？（というと、あの良く家に来ていたなんかエロいお姉ちゃん。いや、それはないか。だとすると、う～ん）」

「え？わかんないかな。ほら空港の火事の時」

「空港の火事？・・・・・ぁ、いたかも。覚えてないけど」

人間いたと聞くとそう思えてしまうものである。実際のところスバルはわかっていなかった。
「あのときは驚いたよ、いきなり私のほうに飛んできたと思ったら私の直前で止まったんだもの。」
「飛んできた？・・・・あああああああ、あのときの追っかけだ。」
「追っかけ？」
「いえ、こっちの話です。はあ、あの時はあんなところにいていただいてありがとうございました。」
「？」

さすがにスバルもあの時の状況から自分を乗せていた鳥はあまり口外してはならない鳥だとわかっていたのだ。ちなみにスバルのあの状況でのなのはの認識は、なんかいた人、もうすこし後に来ればもう少し空飛んでいられたのに、である。なのはのスバルの認識は、自分が助けた娘。である。
すれ違いとかそういうレベルじゃない。

まぁ、それが人間なのかもしれない。

ちなみにそのころ創路たちは帰りだしていた。

「どうなんだ、兄貴」
「いや、どうでもいいが、あの青髪誰かに似ていないか」
「そうじゃなくて。エリオを預けても大丈夫なのかよ。あんなやつらが同僚だぞ」
「いいんじゃないか。なかなかおもしろそうじゃないか。あのオレンジ頭だってアイツの言ってたやつだろ。世界は意外と狭いな。」
「そうか？あたしには弱すぎるように見えるけど。」

「どうでもいいさ。今回のことだってエリオが決めたらしいしな。やりたいようにやらせるさ。どうでもいいが、お前が言っていた恭治が作ってくれるおやつの時間もうすぐだぞ」
「よし、兄貴。急ぐぞ。」
「フ・・ああ」

第１１話　私って天才！！ｂｙスバル（後書き）

スバルは性格バカです。ちなみによくよく考えるとリィンと接点ありそうですけど、このスバル。ほとんど家に帰らず部隊で自分の研究してましたから。あの、空を飛ぶッ！！ってやつです。
ティアも、スバルに対してはそこまでコンプレックス持っていません。なんか、ねぇ。半分ティアが世話焼いている感じっすから。

ちなみにフェイトは原作で最後のあの衝突時に自分も身を乗り出して魔法を使役しようとしていますが、この作品ではあのとき座ってモニターを見ていました。なんか冷たいですか？いやいや、だって試験官リィンだし。

スフィアも原作だと完全に動的感知をしていましたけどね。でもよくよく考えるとあのスフィア上は向けないんじゃないかなとか思います。

まぁそんな感じで今回は終了です。

次ははやての勧誘という名のへぼい演説。それにたいしてスバルが
「いや、別に人助けしたいわけじゃないし」
ティアが
「・・・いや、別にＢランクゲットできればいいです」

アンケートは今週いっぱいにしようかなぁ
誤字脱字やそのほかの指摘、質問、感想などお願いします。

第１２話　まだ大丈夫（前書き）

１２話です。
一応主人公創路なんですけどね。なんか六課側ばっか書いてばっかりです。

第１２話　まだ大丈夫

ぜんかいのあらすじ。
すばるしらないひとになれなれしくされる。

「・・・・・とまぁ、そんな経緯があって八神二佐は新部隊のために上層部に身体を売り、心を売り、そして「ちょおおおおと待ったぁぁ、フェイトちゃあん、さすがに今は冗談言う時やないんよ。」・・でも私はそう聞きましたが？「誰に」えっとぉ、誰でしたっけあの教会の人ですよ。「・・・・カ、カリム～～～～！！」（適当言ってみるもんだね）」

試験が終わり地上本部の一室につれてこられたティアとスバル。
だがはやてがフェイトに説明をお願いという名の押し付けをした。

「そしていまに至る、と」

「スバルあんたなにいってんの？」

「なんでもないよ、あはははは・・・」

「・・・・と、とにかく４年ほどかけてやっとそのスタートを切れた、というわけや」

「否定してないってことは、事実なのかな、ティア」ボソッ
「たぶん女が偉くなるにはそういう道もあるのよ、スバル」ボソッ
わざわざ念話ですればいいものを口に出して言う二人。結構性悪なのかも知れない。まぁ、スバルに関しては疑問だが。
「・・・・・・ちゃうて、ちゃうんんよぉぉぉぉｏｒｚ」
ソファに座りながら膝を抱えて顔を埋めるはやて。一応女だったらしい。てか２０手前でそれは無いよ。

「・・・ぶ、部隊名は時空管理局本局遺失物管理部機動六課」
さすがにリィンもこんなはやてにはひいたらしい。

「登録は陸士部隊。フォワード陣は陸戦魔導士が主体で特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や。」

「遺失物・・・ロストロギアですね」

「まあ、ロストロギアって言ってもね、あいまいだからね。なんでもかんでもロストロギアって考えるのもね。まあ六課は対策専門」
フェイトは自分の過去の経験から自分のようにはなってほしくない。その一心で説明した。

（ティア、ティア）
（なによ）
（ロストロギアってなんだっけ？）
（うっさい話中よ後にして。）
ただそのロストロギア自体わからない人もいるのだが。

「んでスバル・ナカジマ二等陸士、それにティアナ・ランスター二

等陸士」
いつの間にか復活していたはやてが話しかけてくる。
「「はい」」
「私は二人を機動六課のフォワードとして迎えたいて考えてる。厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる、どないやろ」
これだけ言えば食いつくだろう。そんな顔をしてはやてが二人を見る。
「いや、別に強くなりたいわけじゃないし、偉くもなりたくないし。」
ただスバルが速攻で返す。
「・・・へ？」
「ちょっとスバル、断るにしても、もう少し考えたふりしてからにしなさいよ。」
「え～ぇでもぉ」
「ス、スバルは高町教導官に魔法戦を直接教われるし、執務官志望のティアナにはフェイトちゃんがアドバイスできると思うし、な結構いい条件やろ？」
それでも、とはやてが食いつくが。
「なんで私が高町教導官に教わることがいいんですか？」
スバルはすごく不思議に思いながら聞く。

「・・・はひ？」

「え、えっとぉ、取り込み中かな？」
そんななか問題の高町教導官が来る
「あ、あ、へ、平気やよ」
そういうれすぐそばにあった椅子に座り二人と向かい合う。
「とりあえず試験の結果ね」
「？え、でも試験官はリィン軍曹ですよね」
「あ、えっとですね。今回はなのはちゃんに判断してもらったです。」
「それって仕事放棄」ボソッ
「ウッ・・。」

「あははは、えっと、とにかくね二人とも技術はほぼ問題なし。でも危険行為や報告不慮は見過ごせるレベルを超えています。自分やパートナーの安全だとか試験のルールを守れない魔導士が人を守れるなんてできないよね？」

「いや、別に人守りたいわけじゃないし」ボソッ

「・・・・どういうことかな、スバル」
自分が信じて疑わないものを真っ向から否定するスバルにすこしムッとするなのは。
「目的は人それぞれだと思いますけど？。それを人を助けるでひとくくりにされたくないだけです。」

「・・・・・プ、ププア、アハハハハハハ」
いきなり腹を抱えて笑いだすフェイト。
「「フェ、フェイトちゃん？」」
いきなりの親友の奇行に驚き声をかける。

「アハハハ・・・・・・ス、スバルはどうして管理局に入ったの？」
あまりに笑いすぎたのか息を切らせて目尻に涙をためている。フェイトはスバルのことを笑ったのではない。どちらかというと管理局全体に絶望していた自分を笑ったのだ。今フェイトの目の前にいるのはまだ頼りないがまだ、管理局に染まってない二人。まだ希望はあるのだ。
「えっと、陸戦魔導士でも空を飛びたいなって。私空適正は無いですから。」
「アハハハハ、た、高町教導官、この子たち合格にしてあげなよ。」
「えっと、私もですか？」
たち、ということは自分も含まれている、ということだ。スバルはどうやら目の前の執務官に気に入られたようだが、自分は特にそれといった発言はしていない。
それに対しフェイトは念話で答える。
（君、ティアナはスバルの考えを否定してないんでしょ）
（ええ、そこは個人の自由だと思いますから）
（だからだよ。まだまともな思考が出来るんだ。それは管理局にいる以上、一番重要視されるべき点だよ。この組織は人を狂わせる。だから君たちはいいんだよ。）
（はぁ）
「でも、フェイトちゃん。この二人の危険行為や報告不慮は「でもこの二人はそれらに対処できる力もあった。高町教導官、あなたは受験者に高望みしすぎです。たしかにそれらも必要だ。でもそれ以上に必要なのは対応できる能力だ。その点この二人は結果をきちんと出している。」」

「・・・フェイトちゃん」
うすうす感じていたことだがフェイトが自分の意見に対し反論するなどなかったことだった。いつもなんだかんだ言って付き合ってくれた。なのに今は真っ向から否定している。その事がなのはにはショックだった。友達に裏切られたとさえ錯覚した。

「ま、でもこの二人はもうすこし実践が必要かな？よし、二人とも私の任務に数回つきそう。それがBランク合格の条件。もちろん、危ない任務じゃないよ。」

「ちょ、フェイトちゃんそんな勝手」
「八神二佐、私はあなた方より現場を知っています。この二人はあなたの言うとおりのびしろがある。それに部隊に入るのもこの二人の自由だ。それに今はまだ急ぐほどの問題じゃない。んじゃ、二人には後で連絡するね。」

「「は、はい！ありがとうございます！！」」
二人は急いで立ち上がり敬礼する。

そういってフェイトは出ていく。

残ったのはおろおろするリィンと、頭を抱えこんなはずではとつぶやくはやて、ショックのまま下を向いたままのなのは。そして合格したのがうれしいのか満面の笑みで敬礼しているスバルとティアであった。

そのあとそのまま解散になり、部隊への返事はフェイトの任務が終わったあとでいいということになった。

そのあと二人は下の広場でくつろいでいた。

「あ～、なんか意味不明な言葉がいっぱい飛び交うし、フェイト執務官はいきなり笑い出すし、よくわからなかったな。」

「でもよかったはまだ合格に手が届きそうで。それに執務官の任務につき添えるのはラッキーだわ」

「フェイト執務官にライバル心メッラメラだねぇ～」

「そんなんじゃないわよ。それに執務官は私の目的じゃなく手段なんだからね。」

そんな会話を上から見ていたなのはとはやて、そしてリィン。

「・・・・あの二人はどうやろうな？」

「・・・・・・・うん、入ってくれると嬉しいかな」

「・・・やっぱりショックなん？」

「少しね。」

「変わったのは４年前。それ以来会ってなかったからな。ようわからんのや、フェイトちゃんが何考えてるか。」

「うん。私も。」

「どうしたんやろうな」
「新規のフォワード候補はあと二人だっけ？そっちは？」
「いや、一人や。シグナムが迎えにいっとる。ゲイズ中将が一人送り込んできてな、しかもBランク。フォワードをさせろ言う命令や。だからしゃあないけど一人あきらめたんや。さすがに地上に部隊おくのに上に逆らうのはな」
「そっか。」
「ほんなら次に会うんは六課の隊舎やね」
「うん、じゃあね」

空港では
「シグナム二等空尉だ。」
「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります」
「長旅ご苦労だった。」
二人とも遅れてきたのでちょうどいい具合にであったらしい。

「ヴィータちゃん、ザフィーラ。追い込んだわガジェット？型そっちに三体。」
路地裏に青い狼が待ち受ける。そこに丸い形をしたガジェットが進んでくる。
「ティヤアアアアアァ」

鋼の楔が地面から突きだし、一機破壊する。
上からヴィータが降りてきてそのままテートリヒ・シュラークで一機破壊する。といってもデバイスの打撃攻撃であるが。残った一体が上空に逃げる。
「アイゼン」
そう叫ぶと大型単発弾が目の前に出てくる。それをハンマーで吹き飛ばしあてる。
最後の一機を破壊した。

「片付いたか」
「シャマル、残りは？」
「残存反応なし。全部つぶしたわ。」
「出現の頻度も数も増えてきているな。」
「ああ、動きもだんだん賢くなってきている。」
「でもこれくらいならまだ私たちだけで抑えられるわ」
「どうだな」
「ド新人にまかせるにはちょっとめんどい相手だけどな。」
「仕方がない、我らだけでは手が足りない。」
「そのための新部隊」
「はやての、いや、私たちのための新部隊」

その上空ではまた創路とアギトが結界をはって見下ろしていた。

「ナルホド、実力は衰えているな。」
「知ってんのか、あいつらのこと」
「まあな、しかし守護騎士は全部人間体だと思ったんだがな。」
「あれじゃねーか？ほら、使い魔みたいなやつ。」
「使い魔、か。なるほど。そういうことか。」

「どしたんだ兄貴？」
「なに一つおれの体の疑問が解けたのさ、といっても仮説だがな」

第１２話　まだ大丈夫（後書き）

スバルのわがままっプリ
ティアの振り回されぶり
フェイトの勝手ぶり。

以上が今回の注目すべき点です。

思ったんですけどなのはの報告不慮って何のことなんですかね？わからず書いてしまいましたけど。

今少し悩んでいるのがどのタイミングですずかを目覚めさせる。って話なんですよね。
最初はラストでもいいかなとか考えてたんですけど、
もう少し手前でもいいかなとか考えてます。
皆さんはどうですかね。

今度はスカリエッティ側ぷらすフェイトの任務につきそう二人みたいな形ですね。

誤字脱字などの指摘、質問、感想などよろしくお願いします。

第１３話　なんでこんなに戦闘狂が多いんだ。（前書き）

アンケートの結果が出ました。

１．ネギま－１票
２．なのはＡ'ｓ－４票
３．ナルト　－０票
４．ｂｌｅａｃｈ　－１票
５．その他　－４票ただし個別の作品

なので２のＡ'ｓ編をすることにしました。
これから書かせていただきます。お楽しみください。

第13話　なんでこんなに戦闘狂が多いんだ。

「スカリエッティ、貴様が欲しがっていたデータだ。」

違法研究所潰しが一通り終わりひと段落したので、回収したデータをあの女のところに送り、整理していたときに以前スカリエッティが欲しがっていたデータが出てきたのでそれを渡しに来たのである。相変わらずすずかの治療に役立ちそうなデータは無く。少し焦り出している。当初の予想、オレの血が過剰に治療した、という予想は外れていた。

「データ？」

「ああ、お前が以前言っていた聖王の遺伝子情報とやらの情報だ。」
そういい情報を入れたチップを差し出す。

「ぁああ、そういえばそんなこともあったねぇ。どれどれ・・・・へぇ。やっぱりクローン作ることになったんだねぇ。」

「らしいな。用はそれだけだ」
そういいスカリエッティの部屋を出ようとする

「ああ、待ってくれ。」

「なんだ？」

「ほら、エリオ君がいなくなっちゃったじゃないか」

「？だからどうした」

「いやね、うるさいんだよね私の娘たちが。早く戻せやらなんやらで」

「・・・・あいつらは馬鹿なのか」

「・・・・・・・・・・・・・・・いや、最近ね。なんかね。うん、ほら全員女性体に調節しちゃったからさ。だからエリオ君と恭治君がさ、変なスイッチ押しちゃったんじゃないかな。最近じゃウーノ仕事手伝ってくれないんだよ。それでさ何しているかと思えば恭治君と遊んでたりさ。・・・・・私だってね、私だってウーノたちと遊びたい。一緒にあんなこと（解剖）やこんなこと（実験）をやってみたいんだよぉ」

そうとううっぷんがたまっていたのか完全に意識がどこか飛んでいる、

「・・・・欲望がダダ漏れだぞ、あともう少し言葉を選べ。よかったなウーノたちが聞いてなくて。それでお前の愚痴はわかったがそれでなんなんだ。」

「いつも訓練してたでしょ。その相手してやってくれないかな？」

いつもの訓練というのは模擬戦だ。これのおかげで今いるナンバーズの戦闘メンバーとは特に仲が良いらしく、暇があれば、といってもあいつは個々にいる間特にこれといった用事がなかったのでほぼ毎日だが、ナンバーズと戦闘したいた。だからなのかアイツはSクラス並みの実力がある。それに加えてオレがやつに送ったデバイスがそれなりに高性能だったのだが、自分で改造しだし、それにス

カリエッティが手を加えたのでモンスターマシンと化している。まぁ、といってもあいつもじゃじゃ馬だから問題ないらしい。

「なぜオレが。だいたい最終的にエリオを送りだしたのはお前だろう。オレはナンバーズでは問題があると言っただけだ。ドゥーエのような事務課ならともかく送り込むのは機動隊だ。そこで機人を使ってみろ、前線なんていろいろ検査やらあるんだ、ばれるぞ。」

「・・・・・・まぁね、最初は送る気なんてなかったんだけどね。そういうのはウーノがやっておいてくれたからねぇ。ま、それでルーテシアあたりならいいかなとか考えたんだけど、ゼストが許しそうにないからね。まぁ、それでエリオ君かな。さすがに恭治君送るとか言ったら君やナンバーズに殺されちゃうからね。」

「まぁ、そこはわかった。だが、正直オレもそこまで暇じゃない。・・・・いや、はぁ、世話になっているからな。何とかする。」

「本当かい！！頼んだよ。これで胃薬とおさらばできる。」

はぁ、こんな自分の娘たち（ストレス）のことで胃を痛めるようなやつが広域指名手配犯だとはおもわんだろうな、普通。

辿り着いたのは一つの部屋。戦闘訓練施設とは名前だけで、ナン

バーズが勝手に使いだし勝手に広げていったのだ。主に破壊を用いて。
「あぁ、やってるな」
すでに何人かがおり、組み手などしていた。
「あれ、兄貴じゃないっスか」
これはウェンディ。まぁノリはいいが、あほだ。
「なにしに来やがったテメー。」
これはノーヴェ。性格に難アリ。だが、まぁ実力は低くない。
「どうした。なにか用か？」
これはチンク。まぁ、性格面も実力も悪くない。
まあ、これが大体のエリオとの模擬戦メンバーだ。ほかにもちょいちょい来るが基本こいつらはいつもここにいる。
「なに、スカリエッティにお前らの相手をしてくれと頼まれたんだよ。」
「へっ、お前なんかに私たちの相手が出来るのかよ。」
いつになってもその性格は治らないんだな、ノーヴェ。もう少しエリオに接する優しさってもんをオレにだな。はぁ。
「少なくともお前らよりは強い」
「その、相手をしてくれるのはありがたいが、治療のほうは大丈夫なのか？」

チンクお前は本当にまじめに育ってくれて、ほんと、なんであんなやつの技術からお前みたいなのが生まれちゃうんだか。まぁ成長はなかなかしないがな。

「分身にやらせている。魔力量が増えたんでな。5人作ったんでオレ一人でやるのよりはいいだろう。それに、少しお前らの相手するのもいいかと思ってな。オレも少し身体を動かさないとな。」

オレも最近は違法研究所をつぶすのに絶影を使っている。あれはどんどんと凶暴化している。ほんと、どうなってんだか。それに加え食する左腕でリンカーコアを多量に食っているんで魔力量はとんでもないことになっている。さすがに耐えられそうにないんで2つに分けたあと片方を休止させている。今回はそれを起動させてその魔力全部を分身に回している。魔力垂れ流しで作られているんで分身はオレの実力と大差ない。ただこれは大本であるオレが見つかりやすい。まぁそれも違法研究所潰しという観点ではあまり意味のないことなんだが。

「まぁ、そういうならいいんだが。」

「じゃあ早速始めるッスよ。」

「ああ、そうだな。どうするマンツーマンで行くか？」

「そうだな。それでいいかノーヴェ、ウェンディ？」

「ああ、別にかまわないよ」

「おっけーッスよ。ところでマンツーマンてなんすか？」

「・・・・・・いいようだな。」

いちいちお前のアホに付き合うのは面倒だ。

「まずはお前か、チンク」

目の前にはスローイングナイフをいくつか指に挟み込む形で持っ

ているチンクがいる
「前からお前とも戦ってみたかった。」
ナンバーズはどうしてどいつもこいつもバトルジャンキーなんだか。
「まぁいい。こい」
既に双爪は取り出して構えている。チンクが手始めにいくつかナイフを投げてくる。
あまり覚えてないがたしかこいつの先天固有技能は・・・
「ランブルデトネイター」
そういうとオレの一歩手前まで来ていたナイフがいきなり爆発した。
魔力で膜を作ってしのぐ。普通の魔導士ならこんなことしないが魔力が片方のリンカーコアでS近くあるオレには可能だ。まぁ、戦闘スタイルも関係するが。それにしても、そうか確か金属を爆発物に変える能力だったな。
「なるほど、中距離型か。どうしたもんだか。」
少し前の絶影だったらよかったんだが今のアレをだしたら最悪皆殺しだしな。
「仕方がないか。」
双爪を逆手に構える。
オレの最大の特徴は超速再生能力や、魔眼、獣化なんかじゃない。その身体能力と高速演算能力だ。
他の能力を十二分に生かすにはどうしてもこれらが必要だ。まぁ、といっても成功体の恭治と比べると身体能力は落ちるがな。
「さて、構えろチンク。少し本気でいこう」
少し抑えてチンクの後ろに回り込む。そのまま双爪で一閃する。
それをチンクがナイフで受け止める。
そこからはラッシュだ。時には殴り蹴り、そして双爪で切りかかったり。
それらをどうにかしてチンクが防いでいく。ところどころオレの

攻撃が入っているがシェルコートでダメージが軽減されているようだ。
そしてオレの蹴りが決まりチンクが飛ばされながらも受け身を取り距離を置いた。
「・・・ハァ・・ハァ、その刀、どうなっている。私がエネルギーを流しても爆発しないぞ」
そう、さっきのラッシュこいつはオレの刀に接触しまくっていた。多分爆発物に帰るとつもりだったのだろう。
「まぁな。これには術式を彫ってあってな、まぁ別に特段難しいものじゃない。『固定』の術式だ。」
そう、これが地味に役立つのだ。刃もかけないので手入れもほとんどせずに済む。
「クッ・・・なるほど。」
双爪を分離し、短刀と長刀の二刀流になる。短刀を逆手に持ちチンクと距離を置いたまま構える。
「そろそろ終わりにしよう。」
前足に体重をかけ身体に回転をかけながら突っ込む。
その回転を殺すことなく上から短刀で切りつけそのままの流れで下から長刀で切り上げる。
「十字爪」
それがこの技の名前。単純な回転斬りだ。だが、速度が半端なく

出るので刃先の切れ味が増し技自体もすこいことになる。
オレの技が決まったのかチンクが前のめりにオレのほうに倒れてくる。
「チンクねぇッ」
「チンク姉」
外でみていたやつらがこっちに入ってくる。
「テメーよくもチンク姉を」
そのまま殴ってくる奴もいるが。
「峰うちだ。気絶しているだけだろ」
素手で受け止めたが結構いたいんだな。
「それで次はだれがやる。」
「テメーはあたしがボコボコにしてやる。」
「はぁ、わかった。ウェンディ、チンクを運び出しといてくれ」
「ラジャーッス、チンクねぇいくっすよ」
いやも少し丁寧に運べよ。さすがに手を持って引きずるのはな

そのあとノーヴェとウェンディのどちらとも戦った。全員気絶なんかして、はぁ。

「「「・・・ッん」」」
「起きたかこの寝ぼすけども」

「すまない」
「あはは、兄貴強いっすね」
「・・・・」

「まぁいい。それでお前らの改良点だがな。まずチンク。お前は接近戦に入るとどうしても手数が少なくなる」
ま、これは明らかだがな。
「ま、まぁそれは」

「それでお前はもう少し自分の能力の可能範囲を広げるべきだな。さっきもナイフを地面にさしとけば牽制ぐらいにはなっただろうしな。まぁそれにしてもオレの速度についてこられたのや、敵の武器を爆破するという発想は良かったがな。あれの調子でデバイスも爆破するようになったら魔導士殺しだな」
「あっ！」
「気づいてなかったのか」
「だが、対象物が大きいとどうしても力が拡散して爆発には至らないんだ。」
「なら力を一点に集中すればいい。お前はどうしてもすべてを破壊しようとしすぎなんだよ。一部でいいんだよ。たとえばデバイスだってコア付近を爆発すればそれで終わりなんだから。」
「なるほど。その発想は無かった。」
まぁ、チンクの改良点はこれだけだな

「次にノーヴェだが、お前は少し突っ込みすぎだな。確かにお前は近接戦闘が得意だろうがもう少しフェイントやらそういうのを考えろ。これはウェンディーにも言えることだがお前らは蓄積されたデータを自分に適応できてないな。まぁ、それはあとでチンクにでも習え。それでお前の戦闘スタイルだがもう少し遠距離での攻撃も考えろ。別にそれを必ず使えっていうんじゃない。できるようにはしとけって話だ。まぁそれでもあのエアーライナーだったか、まぁそれを使った多重攻撃はなかなかだったな。」

まぁ、こいつまだ自分の武装がまだないからな。だが戦闘中にエアライナーとかいう帯を足場にして多方面から攻撃を仕掛けてきやがった。これはなかなか厄介だったな。

「う、うるせー。あ、当たり前だろ」

「へへノーヴェ照れてるっすね」

「っそんなことねーよ」

「それでウェンディだがお前はその武装を使いこなせ。」

なぜか最近できたのだがこいつの武装であるライディングボード（試作）は砲・盾・乗機の役割を兼ねる。それをこいつはまだ使いこなせてない。

「お前はいちいち動作を区切り過ぎなんだよ。砲撃ならいちいち止まって砲撃するってな具合にな。だからお前はもう少しライディングボードの三つの役割のうち二つを同時に行えるようにしろ」

「二つっすか？」

「乗りながら砲撃したり、乗りながらライディングボードを盾としたりだ。お前でもそれくらいはできるだろ。まぁお前はほとんど空戦が出来るな、その武装のおかげで。」

まぁいくらアホでもそれくらいはな。まぁ、大丈夫だろう。何気に戦うことん関しては才能があるからな。

「了解っス。」
「ま、それくらいか。これで終わりだな。」
「あれ、兄貴そういえばアギトどうしたんすか？」
「ああ、あれは恭治と菓子作りだ。」
ほんと気持ち悪いくらい恭治と仲がいいからな、アギトは。
「キョージが」
「お菓子を」
「作っている？」
・・・・・いや、なんでそんなに急いで厨房に向かうんだ、こいつら。あれ？そういえば今日はほとんどのナンバーズが任務がない。なのにここにいたのは3人だけ。他のやつらは？いや、まさかな。それじゃオレも厨房に向かうとするか。

・・・・もう何も言わん。なぜかナンバーズが全員いるのもスカリエッティもちゃっかりいるのも。
「あれ？兄貴きたのかよ」
アギトがオレに気付いたのか近づいてくる。
「まあな、・・・いつもこんな感じなのか？恭治が作ると。」
「いや、いつもこんなにはいないんだけどセインのやつが他の奴に自慢したみたいでな。」
「なるほど。」

「あ、パパ。」
恭治もこっちにきた。籠を抱えて
「クッキー作ったんだ。食べる？」
そういい籠を差し出してくる。
「ああ。一つもらおう。」
こいつは最近菓子作りがうまくなってきている。今日のだってアーモンドやらなんやらを砕いて入れているのはわかるが、それ以降はわからん。まぁ、うまければいいんだが。
「うまいな。」
「うん！！」
こんな些細な言葉で恭治は良く笑顔になる。
こいつの美点だな。最近じゃ遊び相手だったエリオもいなくなってしまったしな。少し悪いことをしたな。

向こうではなにやら菓子の取りあいが行われている。
「ウーノ私にそのクッキーを渡したまえ。」
「ウーノ姉さま、私まだ一つしか食べてませんのぉ」
「ウーノ、そのだな、私もまだ食べたいのだが。」
「あなたたちは少し遠慮というものを知りなさい。大体これはドゥーエの分です。」
・・・・主にスカリエッティ組だが。
まぁ、これはこれでいいのかもな。

「うん、スバルとティアと私で行きます。・・・ええ、あの違法研究所にね。・・・わかっているよおにいちゃん。フフ・・・うん、さすがにね、そこまでは。うん大丈夫。・・・わかった、じゃあね。」

電話という形でフェイトはクロノと通信していた。なぜ電話かというと今クロノは地球に帰っているのである。

「ふぅ、明日か。・・・・それにしても創路が送ってきているデータ量はすごいな。」

そうフェイトはいま送られてきたデータを整理していた。明日からはスバルとティアに任務に付き添ってもらうかたちで数回違法研

究の取り締まりをすることになる。だが明日は事前に創路に連絡して研究所一つをそのままの状態で維持してある研究所に出向くことにした。そこの調査をしに行く。まぁといってもデータはすでに手元にあるんだが。完全にティアとスバルのための任務である。

「まぁ、やるしかないよね、バルディッシュ」

『ｙｅｓ　ｓｉｒ』

第13話　なんでこんなに戦闘狂が多いんだ。（後書き）

今回はスカリエッティ側です。
まぁ、ちょいちょいとやっていきます。

ちなみにディード、オットー、セッテはまだ生まれていません。

キャラ紹介更新しようかな？
次は3話あたりかな。ティアとスバルの研修は書こうか迷いましたがあまり書く必要もないかな、とか思って書きませんでした。

指摘、感想、質問などよろしくお願いします。

外伝　過去へ（前書き）

本当にお久しぶりです。ずうずうしくも帰ってきました。

震災で亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます.

外伝　過去へ

なんだこれは・・・・

何が起こった。

思えば、原因はあの結晶体だろう。

数時間前

――――

俺はいつも通り研究所をめぐり、治療法を探していた。

だが今回つぶしに行った研究所で研究していたのはエネルギー体だったらしく、早々に切り上げて帰ろうとしたのだがそこに間が悪いことに執務管たちが入ってきてしまったのだ。どうやらこの研究所は管理局に切り捨てられる段階まで来てしまってたらしい。ここで転移魔法で逃れればよかったのだが、どうやらすでに突入時にオレの所在を知っていたのか外に結界かなんらかの転送防止装置によって結界が貼られていたらしく転送し損ねた。

その時エネルギー体を持っていたのは俺だった。普段スカリエッティに迷惑をかけているのだから、少しくらいやつの研究に役立ちそうなものを持って帰ってスカリエッティにでも渡しておこうと思

っていた俺が馬鹿だった。一見高エネルギー体であったアレは実のところ何かほかのロストロギアだったらしく。それを持っている俺はすぐに執務官達の最優先確保目標になったらしい。

そんなわけで全員が一気に俺に攻撃してきた。当然それを受けてやる筋合もなくよけようとしたんだが、転移防止装置のおかげで転移出来なく、身体能力だけでは迫りくる数々の広域魔法をよけることが叶わず、それならといつもの魔力放出によって攻撃をそらせるために魔力を込めはじめたんだがその際手に持っていたロストロギアに反応したらしく突如としてそのロストロギアが輝き始めた。魔法が当たる前にロストロギアが発動したらしく俺は意識を保とうとしたがそれも無駄に等しき抵抗だったらしくしばらくして俺は意識を失った。

――――

それが数時間前の出来事だ。

今俺はどこかもわからない丘にいる。気がついたときにはここにいた。どのような理屈かは分からないがどこかに飛ばされたのだろう。すでに手にはロストロギアはもうないみたいだが。だがそこから見上げる空はどこか既視感があった。いや、違う、空がじゃない、この場所がどこか懐かしいような感覚がする。立ち上がりあたりを見渡して俺は驚愕した。まずあのロストロギアがまさか世界を超えて転移するとは思わなかった。そう、まさか地球、しかも海鳴市に転移するとは。そしてこの世界でいま魔法が使用されている。結界が展開されているのがその証拠だ。

どうして結界が展開しているのか分からないが、あまりにタイミ

ングが良すぎる。俺が飛ばされた先で魔法が使用されていること。管理外世界で、だ。偶然でかたずけるには少し都合がよすぎる。もしそうじゃなかった場合俺は管理外世界に突如として現れ、目撃から追われることになっただろう。もしそうなってもさほど苦にはならないのだろうけど。

■

あまり一人で考えていても意味がない、と創路は腰かけていたベンチから立ち上がった。ふと創路の視線が月村の屋敷の方向を向いた。あまり帰ることを考えなかった。それは罪の意識、いまだに何一つ進展してないすずかの治療、など理由の候補を挙げればすらすらと出るのだが、そのいずれにしろ創路には帰る場所があり、そこにこの5年間帰ることも連絡をすることもしなかった。それでも地球に、それも海鳴市に偶然でも来てしまったのだから顔を出すのが筋だろう。一度屋敷に入ったらしばらくは出て来れないだろう。それこそいろいろなことを根掘り葉掘り聞き出されるだろう。だが創路は月村の屋敷に行くことを考えただろう。そう、この結界が展開されてなければ。多分結界が展開されているということは今知り合いのだれかに逢うことはないだろう。いずれにしろ、この結界が消えるまで俺の行動にあまり意味はない、そう思い再びベンチに座りこの結界の中心に初めて意識を向けしばらくして目を見張ることになる。

そこには見たことのない銀髪の女と二人の少女が魔法線を繰り広げていた。結界が展開されている中魔法線が繰り広げられているのは不思議ではない。ましてや創路の位置からはその少女たちや女の存在をかろうじて認識できる程度の距離だ。その少女たちの外見を判断できることなど無理だ。では何がそれほど創路の意識を引いた

か？それはこの結界の中心にある魔力に一つだけ自分の知っている魔力があったことが原因だった。創路が地球に転移したのは全く偶然だ。

だがこの魔力の持ち主は地球に任務があると言っていただろうか？

――いや、単に俺に伝えなかっただけかもしれない。

――こちらが返信せずとも、自分でどこかに任務の際には必ず連絡するようなやつだ。それはない。

――緊急招集か？いや、それにしては数が少なすぎる。

――・・・・おかしすぎる。

この時創路は初めて自分の置かれた状況がおかしいことに気付いた。

創路の感覚でいえば彼は管理外世界に転移しただけのはずだった。だがそれではおかしいのだ。それだけでは創路がこの世界に来た原因、あのロストロギアがロストロギアたる理由が見当たらないのである。世界単位で転移できる、という魔導道具はすでに発明されている。それなのに、たかが世界を超えて転移、しかも全くのランダムで行き先が変わってしまい転移先では手元を離れるような石ころをロストロギア判定することはおかしいのである。もちろん管理局が解析できなかった可能性はあるが、どれだけ腐っていても優秀なのには違いない。その管理局のなかで解析できていなかったのはそれ以外の働きをする機構があのロストロギアに含まれていたのだろう。

だからこそ彼がただ地球に来たのはおかしいのである。なにかほかにもあるべきだろう。

――まったくなんだかんだで俺はトラブルに巻き込まれる性質らしい。

結局創路は再度座ったベンチから立ち上がり結界の中心に向かい歩いていった。

そこで待っていたのは創路にとっては許しがたい事実だけだった。

■

少女は空を見上げていた。月村すずかである。そしてその傍らにはアリサ・バニングスもいる。理由は不明であるが彼女たちが結界内に残されていたのである。

「やっぱりだれもいないよ。急に人がいなくなっちゃった。あたりは暗くなるし、なんか光っているし。いったい何が起きているの？」

そんな問いにすずかが答えられるわけもなく、ただ疑問だけが増えていく。それらに対処する術を彼女たちはまだ持っていなかった。

「とりあえず逃げよ」

「う、うん」

そう、単純ににげること以外は。

彼女たちがにげている間にも刻々と戦況は変わっていた。２対１だったにもかかわらず優位にはたてず、フェイト、なのは逆に力の差を見せつけられていた。
そんな中、銀髪の女、闇の書はなのはを蒐集により使用可能になったなのはの魔法をしようとしていた。それは彼女の才覚が確実な形としてあらわになった収束魔法、スターライトブレイカーだった。
フェイト、なのは、合流したユーノ、アルフは皆一目散に距離を置くことにしたのだが、バルディッシュが一般市民の存在を認知したことにより急遽なのはとフェイトはスピードを上げ砲撃から距離を置きつつも一般市民の保護に向かった。

そしてなのはとフェイトは民間人トの距離を少し先の交差点に目視するまでに詰めた。だがここでイレギュラーが起こった。魔力の充填、砲撃の準備が予想より早く終わってしまったのである。そのためスピードを上げてどうにかその民間人がすずかとアリサであることに気がついたときには発射の態勢に入っていた。

『・・・スターライト、ブレイカー・・・』

発射された砲撃は着弾とともにドーム状に広がっていった。そのスピードはなのはとフェイトのスピードよりはるかに早かった。

「すずかちゃんっ、アリサちゃんっ」
「ダメ、間に合わないっ」

結果すずかたちまであと数メートルという距離まで来ていたのだがなのはたちはスピードを緩めて防御しなければならなかった。そんな距離からプロテクションを張ったところですずかたちを守れるわけもなく、砲撃はすでにすずかたちを飲み込もうとしていた。

すずかとアリサはお互いを抱きしめて動けずにいた。それは未知の恐怖が目の前にあることもあったが、親友と思っていた二人が仮装パーティにでも行くような格好をして空中を飛んでいることも問題だった。彼女たちの頭はあまりに理解不能な現実を理解できずにいたのだ。そして刻々と死の恐怖が彼女たちに迫っていた。

そして無慈悲にも砲撃は彼女達を飲み込んだ。

■

創路が行動を起こしたのは町に入って紫の髪にヘアバンドという珍しい組み合わせを見かけた瞬間だった。それはほとんど無意識下における行動だった。だがこの時ばかりは創路は自分の理解のできない行動に感謝した。

砲撃が彼女たちを飲み込む寸前にギリギリ彼女たちの前に体を滑り込ませたのである。だがそれから魔力を放出する時間があるわけもなく彼は二人に覆いかぶさるようにして彼女たちに攻撃が当たらないようにしたのだ。

砲撃が止んだ後、創路の背中は砲撃により骨が見えるまで抉れていた。彼の背中は砲撃を受けている間も再生と破壊が繰り返されていた。だが創路はかろうじて意識を保っていた。彼の超速再生能力は意識がないと発動しないのだ。常時展開といっても意識がある、という条件下なのであった。つまり意識を失うと彼は命の危険があった。だが幸か不幸か彼はこの程度で意識を失えないのである。痛みに耐性が付き過ぎているのである。

背中の修復も終わり自身がかばった二人を見て創路は何とも言えない表情をした。

「はぁ、まったくもって現実っていうのは予想できないね。」

そこには小学3年生ぐらいの自分の知り合いに似すぎた少女たちがいた。

外伝　過去へ（後書き）

外伝始めました。

結構前にアンケートを行ったやつです。

意見、感想、指摘などお願いします。

外伝　過去へ　０２（前書き）

今回のこの外伝は予想以上にむずかしいです。

なんか、全然進まない。ｏｒｚ

ではおねがいしますぅ。

外伝　過去へ　０２

自分がかばった少女たちは月村すずかとアリサ・バニングスだった．

そして彼女たちの年齢を考えればすぐに自分を飛ばしたあのロストロギアの能力がわかった．それは彼が予想していたよりもはるかに常識を超えた能力だった．

つまりあのロストロギアは時空を超える能力、もしくはそれに準ずる能力があるのである．

管理局が解析できなかったのは仕方ないのである．実際に発動したところでそれを観測する術は彼らにはなかっただろう．そして創路が発動できたのも数々の偶然が合致した結果に過ぎない．

それを知ると同時に彼はもう一つの事実に気付いた．今の彼には元の時間に変えるすべがないのである．手元を離れてしまったロストロギアの行方はわからない．最悪のケースとしてはあのロストロギアが一回きりの消費型だった場合だ．その場合本当に彼の帰る術は失われる．

「・・・・本当にまいったな、これは．」

外伝　０２

■

フェイトとなのはは余波がおさまってすぐに後ろを振り返った．自分の友人達の安否をいち早く知りたかった．普通に考えればあの砲撃に飲み込まれたら助かりようがないのだが、それでも彼女たちはどれほど小さくても可能性を信じたかった．

「すずかちゃんっ、アリサちゃんっ！」

振り返って見えたのは知らない男と彼女の友人たちだった。怯えはしているものの彼女たちは無事だった。それをみてなのはは彼女たちのもとに飛んで行った．

フェイトも同じく行動しようとしたが、ふと彼女の視界にあるものが目に入った。どれはカチューシャともヘッドバンドともとれるものだったが問題はそれをある男がつけていてそのヘッドバンドの模様や形はどこかで見覚えがあったものだったからだ。フェイトはすぐに答えを得られた。すぐ横に答えが用意してあったからだ。す

ずかのヘッドバンドと同じものなのである。市販のものだった場合さほど問題ではないのであるが、彼女は少し気になった。そして彼女もすずかたちに近づいて行った。

「すずかちゃん、アリサちゃん、じっとしててね。あの、あなたも」

なのはとフェイトは砲撃から身を守ると同時にアースラにいるエイミィにこのことを伝えていた。そしてすぐに転移魔法で安全な場所に飛ばしてもらうように頼んでおいたのだ。

「俺は、いい。」

創路はそう言い、いち早く転移陣から抜けた。それに気付きなのはが入るように言うが、それに従う創路でもなく結果、すずかとアリサだけが転移することになった。

「ちょ、ちょっとっ」

「・・・あの、あり」

二人がどうにか言葉を口にしたときには転移が行われてしまった。

「ど、どうして出ちゃうんですか！」

「気にするな、自分の身くらい自分で守れる。なに、勝手にやるさ」

「そういう問題じゃないと思うんですけど。」

そういって創路はそのまま去って行った。

「見られちゃったね。」

「うん、でも・・・」

ここは戦場である。気持ちを切り替えないとすぐに落とされる。二人はすぐにアルフとユーノに連絡し二人の保護をお願いした。

■

創路は背後から来る気配を感じ、すずかたちから少し距離を置いた。前にすずかから聞いた話と今の状況とで創路は自分が今どのような状況に置かれているか理解できた。もちろんこの結界内が管理局の監視下にあることも容易に想像できることだった。幸いなことにまだ創路は魔力を放出、解放などを行ってなく、通常時から魔力反応を抑えているので感じられても一般人レベルなのである。だからこれを機に管理局に絡まれることも少ないだろうが創路としては、どうにかフェイトたちをやり過ごしたかった。といっても相手は小学生。言いくるめるのはさほど難しいことじゃなかった。

転移前のすずかとアリサの様子を見てどこか懐かしいものを感じた。アリサは原因を追及しようとし、すずかは創路に感謝しようとしていた。なぜか得した気分になったのだ。

転移が終わった後、フェイトたちが再び戦場に戻るのを確認した後、創路はこの場所を後にしようとしていた。ここが過去、と推測できるが、それがもし自分のいた時間とつながっていた場合あまり出しゃばってしまうと本当の意味で帰れなくなってしまう。どういう危険性をはらんでいるか分からないのである。すでに自分の行動

でその危惧すべき状態になってしまっているかもしれないのだ。そういう意味で先ほどの転移をしてしまうのは危なかった。転移魔法を多様できる創路はその魔法の特異性を良く理解していた。転移という魔法はその性質上転移対象の情報を得られることが可能なのだ。もちろん発展して初めてできることだが。管理局がどこまで魔法を発展させられているかにもよる。そして得られる情報の程度は低いものだがそれでも情報が渡ってしまうのだ。それは創路としては避けたいことだった。

「・・・あなたは、誰？」

だが、後ろから声をかけられた。フェイトである。

「君の露出癖はこのころからか？」

「え？」

「いや、なんでもない」

「・・・ねぇ、あなたはだれ？」

どうやらこっちが答えるまでこれは付いてきそうだ。

「ちょっとした、迷子、だな。帰り方がわからなくてな。」

まさか自分の名前を出すわけにもいかず適当にはぐらかすことにした。どうにも自分が知っていた連中が幼いというのは、やりにくいことこの上なかった。

「だったら、やっぱり転移したほうが・・・」

「こっちにも事情ってものがあってな、それより後ろ向いたほうがいいんじゃないか？」

「えっ？」

後ろではすでに戦いが始まろうとしていた。

■

なのははひとりで闇の書とその主に停止と投降を呼び掛けていた。そして、自分たちの無実を訴えた。だが会話は一方通行。彼女を闇の書と呼んでいる限り意思の疎通などできるはずないのだ。

「永久の闇に沈め」

魔法が発動し地面から触手が出てきてなのはをとらえる。同様にして後ろから迫っていたフェイトもからめとられた。

後方からそれを眺めていた創路はココにはもう用はないとばかりに帰ろうとしていた。この戦いに干渉しなくても結果として数年後この二人は前線で活躍していたのだから。もちろん敵が闇の書、もしくは夜天の書というのには惹かれるものがあった。しかし彼にはそれより優先すべきことがあった。そう、夜天の書はその程度の価値しか創路にとってないのだ。

しかしここで彼の予想外の事態が発生したのだ。彼の左手、すなわち食する(イーター)左手が反応したのだ、夜天の書に。やがてその反応は徐々に大きくなり始め、はっきりとした形で彼にも伝わってきた、自分の左手から発せられる敵意にも似た意思のようなものが。これは彼にとって初めての事態だった。この左手は自分が生まれたときからこうだった。だがこのようなことは起こったことがなかった。だいたいこの左手に意思があるとは考えてなかった。

こうなってしまってはココを去るのは逆に危険だった。自身の左手に何が起こっているか分かってないのであるから。だからと言ってここにいることが安全とはわからないのである。

自分のためにもこの戦いにかかわるか、彼は選択しなくてはならないのである。

そうしているうちに周りに火柱が立ち始める。何かが起きようとしているのは明白だった。

ふと事の中心を見ると小規模な魔力的な爆発が起こった。

「この、駄々っ子ッ、・・・・言うことを聞けぇ」

『ｓｏｎｉｃ　ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ』

そして目に映ったのは敵に突っ込もうとしているフェイト・テスタロッサ。だが、創路はこれに嫌な予感がした。そう感じた瞬間にま

たしても創路の体は動いていた。魔力による身体強化を行い、早すぎる速度に身を置きながら彼は左手が敵に近づくにつれ徐々に自分の制御下を離れ暴走し始めるのを感じた。

「お前も我が内で眠るといい」

「はあああぁぁぁぁっ！！」

しかしフェイトの高速の一撃は闇の書本体に直撃することなく、魔法陣に阻まれてしまった。そのすぐ後創路はフェイトの後ろに到着し、彼女を抱え離脱した。

「とんだハズレくじだよ、まったく」

しかし闇の書の魔法はすでに発動していたためフェイトの体は徐々に光の粒子になりはじめ、そして創路を巻き込みながら、吸収された。

『ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ』

外伝　過去へ　０２（後書き）

最近ガンダムＳＥＥＤ見直して気づいたんですけど、キラって初めは１６だったけど終わりじゃ、１７なんだねってこと。・・・誰も祝ってあげなかったんだな。
どうでもいいが、ＳＥＥＤのＨＧはひどい出来だなッ！
どうしてこんなことしてたかというと、ＳＥＥＤとなにかをクロスさせたいからなんですけど。

まぁ、候補としてはリリカルなんですけど。そのほうがこの小説の障害にもならない感じでいいですし。

なんかほかにいいものありますかね。まぁ、自分が知ってないと無理なんですケド。
学業も始まるし。だれだよ5月から始まるよぉ~ とかいったの。ぜんぜん４がつからはじまるじゃないか。

まぁ、そんな感じです。

で、今回の話なんですけど。自分的には、あ、やっちゃったな。というか、衝動でしか書いてないんですけど。
Ａ'ｓってなんか見直すとすごいですね。イロイロ。だいたい結界に取り残されるって何？てな感じがしますもん。あれってなにで取り残す対象決めてるんでしょうね。だっていままでこんなミスなか

ったし。あれ？これって管理局よりユーノのほうが・・・。でもなんか都合よすぎるよねぇ~。取り残された対象があの二人っていうのが。あの緑髪激甘党タヌキの策略としか思えない。

まぁ、そんなこんなでこんなペースで更新してきま・・・してけたらいいなぁ～。

いつものように、誤字脱字、意見、感想、指摘、などありましたらよろしくお願いします。

外伝　過去へ　０３　（前書き）

すごいお久しぶりです。

外伝　過去へ　０３

ね・・・・きて・・・・・・

もう・・・・・・きて・・・・

もう、起きてったら！！

ゆっくりと目を開ける。いつもと何も変わらず、起きると月村すずかが盛大に人の体を人外れた力で揺らしてくれる。しかしながらまだ眠い。

「・・・・・・」

昨日は確かまたアリサに膨大な仕事押しつけられ終わったのは数刻前だ。正直起きろと言って起きれるわけもない。

「もうっ、早く起きてよ。」

いい加減頭に来たのかすずかが行動を起こす。何をするかは簡単に想像できる。

バサッ

そう、寒いこの季節に布団を剥ぎ取るというのはある意味拷問よりひどい。

仕方なしに目を開ける。

あぁ、すずかなんでそんなにニコニコしているんだ。

なんでそんなに満足そうなんだ。

そんなに俺の睡眠を妨げたいのか？

「・・・・・おはよう。」

「おはよう。やっと起きたね、もう、ファリンが起こしにきたのも知らないでしょ。早く着替えて下降りてきてね。」

「ん、わかった。」

ゆっくりと体を起こし、着替えて下に降りる。すでに朝食の準備は整っており皆席についている。

「おはようございますぅ～。」

「あぁ」

そう、これが俺の日常だ。相も変わらず恭治は胃が異次元にでもつながっているのか大量の食事が飲み込まれてゆく。それに張り合うつもりなのかファリンも次から次から皿を平らげてゆく。それをすずかがほほえましげに見ている。この胸やけが起きそうな状況を毎朝みるのも慣れた。

そのあと久しぶりに外に行く、というよりすずかに連れ出される。

特に行きたいところがあるわけではないのだが・・・

商店街に出てすずかと共にウィンドウショッピング。特にすることもなく、すずかに引っ張られてあの店この店。気づけばウィンドウショッピングのはずが俺が山のような荷物を持つ羽目に。

「重い。」

俺の超人的な身体能力を持ってしてもあまりに重すぎる。

「はいはい、次の店いくよ。」

「おい、まてまだ買うのか。まだ買い足りんのかぁぁぁぁぁ！」

いつも以上の怪力でまた店に連れて行かれる。いつまで続くのだ、これは。

夜になる夜食を終え、下で寝てしまった恭治を上につれてすずかの部屋に寝かせる。

「ふふ、今日は本当に楽しかった。」

すずかがベッドに腰掛けふてぶてしくベッドの中央で眠りこんでいる恭治を見ながらいう。

「あんなに買い物を楽しんだのは久しぶり。ありがとう。」

窓から外を見ながら答える。

「ああ」

「どうかしたの？」

「・・・・・・・もう、いいか」

「え？」

すずかが何を聞いているのかわからないような顔でこっちを見る。

「・・・この世界は俺にとって都合がよすぎる。」

「な、何を言っているの？」

「どういうわけか知らないがお前は“すずか”なんだろう？」

「ど、どうして」

「おれがお前のことをわからないとでも思っていたか？この世界でお前だけが人間だった。他は魔力の幻像。」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・月村すずかはまだ眠っている。俺はこの5年近く何の成果もあげていない。俺は結局お前を救えなかった。」

「・・・・・・・・・・」

「だが、だがおまえが待っていてくれるなら、俺は・・・必ずおまえを目覚めさせてやる。」

「ずるいなぁ、そんなこと言われちゃ・・・」

急に涙をこぼしながら泣きだす。そんなすずかをみて創路は頭を掻きながらすずかを後ろからゆっくりと抱きしめる。
まるでそれはその存在をしっかりと自分に刻みつけるように。

「泣くな・・・こういうと時どうしたらいいのかよくわからない。」

「もう、こんなときまで正直に答えないでよ。」

ゆっくりと世界が崩れ始める。それでも創路はすずかをはなさなかった。

しかしすずかが創路の腕をふりほどいて、創路と向き合った。

「ふふ、そのカチューシャにあっているね」

「おまえが起きるまで俺が預かっておこうと思ってな。」

「はやく迎えに来てね。はやくしないとおばあちゃんになっちゃうよ。」

「きっとそれでもおまえは美しいさ。」

世界の崩壊が終わり、ただ黒い空間だけが残る。しかし創路の後ろには出口ができていた。

「じゃあ、“ばいばい”」

「・・・違うだろ」

「え？」

「またな」

「・・うん！」

すずかの笑顔を見て、知らずしてか創路も笑顔になっていた。そして後ろを向き一度も振り返らず出て行った。

振り返ってしまったら、ずっとここにいたくなる。
それは自身への最大の裏切りだろう。
今はただ自分を信じて前に進むしか創路はできないのである。

外伝　過去へ　０３　（後書き）

モチベーションとかの問題ですかね。
うまく書けないです。

すずか「ねぇフェイトちゃんとキスしたよね」
創路「・・・・」
すずか「ねぇ？」
創路「・・・・・・シマシタ」

的なもの書こうとした数か月前。

あと２話ぐらいかな外伝。

誤字脱字などあればお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0723m/

故にオレはバケモノ

2011年8月4日19時33分発行